

柏屋郡柏屋町
戸原麦尾遺跡(1)

—福岡市多々良浄水場建設に伴う緊急調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第189集

1988

福岡市教育委員会

柏屋郡柏屋町
戸原麦尾遺跡(1)



遺跡調査番号 8403
遺跡略号 KTM

1988

福岡市教育委員会

卷頭図版1



S K03出土青銅製鳳凰文柄鏡と青磁碗

卷頭図版2



S K 1677出土青銅製六花鏡、白磁碗・四

卷頭図版3



S D 3802出土板縒（縲馬）



輸入陶磁器、國產陶器、土師器一括

序 文

福岡市では昭和53年の大渴水の経験以来、水質源の安定的確保を目指し各種の渴水対策事業を進めてきております。その一貫として柏原都前屋町内において多々良浄水場の建設を昭和59年度より開始し、昭和63年度に完成の予定です。

この建設工事にともない、足掛け4年にわたる埋蔵文化財の発掘調査が行われました。

本報告書は、その調査結果の概要について報告するものです。文中に見られるようにこの4年間の調査においては、鎌倉時代～室町時代に営まれた館跡や集落跡についてその全容を明らかにできたとともに、当時の対外的な交易の一端をしのばせる青銅製の鳳凰文柄鏡や各種の輸入陶磁器などが出土し、多くの貴重な成果を得ることが出来ました。

本報告書が埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願いますとともに、発掘調査から資料の整理にいたるまでの、多くの方々のご協力に対しまして心からの感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐 藤 善 郎

例 言

1. 本書は、昭和59年度から62年度にかけて、福岡市教育委員会が発掘調査を行った、福岡県柏原郡柏原町に所在する戸原麦尾遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 遺跡の発掘調査は、福岡市水道局が事業主体として計画した多々良浄水場の建設に伴って実施されたものである。
3. 発掘調査の本報告は昭和63年度と64年度に刊行する予定である。
4. 遺跡の発掘調査は、池崎謙二、田中壽夫、荒牧宏行が担当した。
5. 本書に収録した、写真、実測図等の記録は池崎、田中、荒牧、白石公高、竹下弘美、川添佳子、伊藤末信が分担して、撮影、実測等を行ったものである。
6. 本書に使用した地図は、Fig. 1 が国土地理院発行の「福岡」(1/25000)、Fig. 3 が旧帝國陸軍陸地測量部発行の「箱崎」(1/20000)、Fig. 4 が福岡市発行の都市計画図「土井」(1/2500)を原図とした。
7. 本書に使用した方位はすべて磁北である。真北との偏値は、西偏 6°40'である。
8. 掲載した遺構は発掘調査において用いた略号および通し番号をそのまま用いた。したがって例えば井戸の説明の項で、文中に SX を符した遺構が出てくる場合もありうる。遺構略号の内容は以下のとおりである。なお掲載遺構の所見については一覧表を参照されたい。

SA○○	杭列、構列	SK○○	土壤、木棺墓（草址）
SB○○	掘立柱建物	SP○○	柱穴
SD○○	溝状遺構	SR○○	山河川
SE○○	井戸	SX○○	性格不明の堅穴

9. 掲載した遺物にはすべて通し番号を付した。各遺物の所見については一覧表を参照されたい。
10. 掲載した遺構・遺物は、調査において検出されたもののうちから選定したものであり、全体の数から見ればごく一部である。残りの遺構・遺物については本報告時に提示する予定である。
11. 本書は、池崎、荒牧との協議のもと田中が執筆・編集した。
12. 出土遺物、記録類は本報告終了後に福岡市埋蔵文化財センターへ保管する予定である。

調査番号	遺跡名	遺跡略号	調査地地籍	開発面積	調査面積	調査期間
8403	戸原麦尾遺跡	KTM	福岡県柏原郡柏原町 大字戸原字麦尾・他	80000m ²	32670m ²	昭和59～ 62年度

本文目次

I. はじめに.....	1
II. 遺跡の位置と歴史的環境.....	3
III. 発掘調査の記録.....	6
(1)発掘調査の経過と概要.....	6
(2)第Ⅰ区の調査.....	8
(3)第Ⅱ区の調査.....	17
(4)第Ⅲ区の調査.....	24
(5)第Ⅳ区の調査.....	31
IV. おわりに.....	34

挿図目次

卷頭図版 1、SK03出土青銅製鳳凰文納鏡と青磁碗	
卷頭図版 2、SK1677出土青銅製六花鏡、白磁碗・皿	
卷頭図版 3、SD3802出土板絵（絵馬）、輸入陶磁器・国産陶器、土師器一括	
Fig. 1、戸原麦尾遺跡と周辺遺跡分布図（1/25000）	2
Fig. 2、遺跡遠景（航空写真、西から）	3
Fig. 3、戸原麦尾遺跡の位置と旧海岸線の復元（1/40000）	4
Fig. 4、条里の推定復元と周辺字名（1/10000）	4
Fig. 5、作業風景（第Ⅰ区開始時、南から）	6
Fig. 6、戸原麦尾遺跡調査区設定全体図（1/3000）	7
Fig. 7、第Ⅰa区完掘状況（東から）	8
Fig. 8、第Ⅰb区完掘状況（西から）	8
Fig. 9、第Ⅰb区遺構分布図（部分、1/300）	折り込み
Fig. 10、掘立柱建物平面および断面図（1/100）	9
Fig. 11、第Ⅰb区中央部遺構分布状況（東から）	9
Fig. 12、第Ⅰb区中央部竪穴遺構切合い状況（南から）	10
Fig. 13、柱穴、竪穴遺構出土土器実測図（1/4）	10
Fig. 14、第Ⅰb区北東部溝状遺構検出状況（南西から）	11

Fig.15、SE3086平面および断面見通し図（1/30）	11
Fig.16、井戸・溝出土土器実測図（1/4）	12
Fig.17、SK02遺物出土状況（西から）	12
Fig.18、SK03遺物出土状況（北から）	12
Fig.19、SK1677遺物出土状況（北から）	13
Fig.20、SK1677遺物出土状況（部分拡大・北から）	13
Fig.21、SK02・03・1677出土遺物実測図（1/4）	13
Fig.22、第Ⅰ区検出懸穴遺構実測図（1/40）	14
Fig.23、第Ⅰ～Ⅱ区出土の貨銭拓影（1/2）	15
Fig.24、第Ⅰd区完掘状況（北から）	16
Fig.25、第Ⅰb区南西部および東南部土層断面図（1/50）	16
Fig.26、第Ⅱ区遺構分布図（1/300）	折り込み
Fig.27、第Ⅱa区完掘状況（北から）カラー	17
Fig.28、第Ⅱb区完掘状況（北から）カラー	17
Fig.29、第Ⅱc区完掘状況（西から）カラー	17
Fig.30、第Ⅱd区完掘状況（東から）カラー	17
Fig.31、掘立柱建物平面および断面図（1/100）	18
Fig.32、第Ⅱb区掘立柱建物検出状況（北から）	18
Fig.33、SX115完掘状況写真（南から）	19
Fig.34、SX115平面および断面図（1/50）	19
Fig.35、SX115・116出土土器実測図（1/4）	20
Fig.36、SE04井筒内遺物出土状況（北から）	21
Fig.37、SE04平面および断面見通し図（1/30）	21
Fig.38、第Ⅲd区抗列SA11・旧河川検出状況（東から）	22
Fig.39、包含層・柱穴・井戸・溝出土土器実測図（1/4）	22
Fig.40、第Ⅲb区完掘状況（東から）	24
Fig.41、第Ⅲc区完掘状況（南から）	24
Fig.42、第Ⅲb区遺構分布図（1/300）	25
Fig.43、掘立柱建物検出状況（北東から）	26
Fig.44、掘立柱建物平面および断面図（1/100）	26
Fig.45、第Ⅲa・c区遺構分布図（1/300）	27
Fig.46、SD3802完掘状況（東から）	28

Fig.47、SD3802内土層堆積状況（東から）	28
Fig.48、SD3802出土板絵実測図（1/2）	28
Fig.49、SK46出土状況（南東から）	29
Fig.50、SK46平面および断面図（1/30）	29
Fig.51、SX47（井戸）断面（東から）	29
Fig.52、SK52遺物出土状況（南から）	30
Fig.53、SX70完掘状況（東から）	30
Fig.54、第Ⅲb区作業風景（南東から）	30
Fig.55、第Ⅳb区造構分布図（1/300）	31
Fig.56、第Ⅳb区完掘状況（東から）	32
Fig.57、第Ⅳb区南西部造構分布状況（北西から）	33
Fig.58、SX4245完掘、鈎出土状況（西から）	33
Fig.59、戸原麦尾遺跡概要模式図	34

表 目 次

Tab. 1、戸原麦尾遺跡調査経過表	7
Tab. 2、遺構所見一覧表	36
Tab. 3、掘立柱建物計測値一覧表	37
Tab. 4、遺物所見一覧表	37

I はじめに

(1) 調査に至る経過

福岡市においては、都市化の進展と人口の急激な増加に対し、安定的な水質源、特に飲料水の確保と供給が緊急の課題とされ、昭和53年の大渴水以来、行政上の重要な施策の一つとなっている。この施策の一貫として東区香椎字長谷に貯水ダムの建設が予定されるとともに、浄水施設として多々良川左岸に多々良浄水場が昭和59年度から着工されることとなった。

多々良浄水場建設予定地周辺は多々良遺跡、多々良込出遺跡、内橋廃寺推定地などの古代から中世にかけての遺跡が分布しており、また古代官道である西海道の推定線上にも位置していることから、何らかの遺跡の存在が予想された。

埋蔵文化財課では昭和59年7月上旬に現地踏査を行い、建設予定地内において古代から近世にわたる遺物の散布が確認された。これに基づいて遺跡の範囲、遺存状況等を明らかにするために、同年7月24日から8月10日にかけて試掘調査を行った。調査の結果、建設予定面積(80000m²)の約30~35%にあたる25000m²前後の範囲に鎌倉時代を中心とした時期の遺構が確認され、建設工事に先立っては発掘調査を要すると判断された。

これらの事前調査の成果を踏まえて、教育委員会と水道局間で遺跡の保存上の問題も含めて協議を重ね、昭和59年10月16日から調査を実施することになった。なお調査にあたっては下記の体制で行うことになった。

(2) 調査の体制

多々良浄水場建設主体	福岡市水道局	前事業管理者	出口末人
		現事業管理者	小田一郎
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	佐藤善郎
調査総括		埋蔵文化財課長	柳田純孝
		埋蔵文化財第一係長	折尾 学
事前審査		文化財主事	山崎純男
調査事務担当		埋蔵文化財第一係	松廷好文
調査担当		(昭和59年度)	池崎謙二
		(昭和59~62年度)	田中壽夫
		(昭和60~62年度)	荒牧宏行



Fig. 1. 戸原麦尾遺跡と周辺遺跡分布図 (1/25000)

- | | | |
|----------------|-----------------|-------------|
| 1. 戸原麦尾遺跡 | 8. 柚須板碑 | 15. 名占道遺跡群 |
| 2. 多々良込用遺跡 | 9. 旦守八幡宮板碑 | 16. 湯ヶ浦古墳群 |
| 3. 多々良通跡 | 10. 広田板碑 | 17. 舞松原古墳 |
| 4. 内輪庭寺(推定地) | 11. 東円寺址板碑 | 18. 八田長坂古墳 |
| 5. 球磨山東山寺(推定地) | 12. 土岸古墳(前方後円墳) | 19. 鮎見深堀古墳群 |
| 6. 須木寺址 | 13. 龍野神社古墳、板碑 | |
| 7. 「夷守駅」推定地 | 14. 江辻尾古墳群 | |

II 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の位置と立地 (Fig. 1~3)

博多湾沿岸部には西から糸島、早良、福岡、柏屋平野と呼ばれる小平野が河川の沖積作用によって形成されており、それらは幾つかの山塊丘陵により画されながら地理的なまとまりを有している。柏屋平野はこの中にあって博多湾の最も北東部に位置しており、北から多々良川、須恵川、宇美川を擁し、河口部にデルタを形成している。

戸原麦尾遺跡は、この柏屋平野の北端部を西流している多々良川の左岸に点々と形成された、沖積微高地上に立地している。本遺跡から現在の海岸線までは約4.5kmで、多々良川河口までは約2.5kmほど上流にあたる。調査対象地における標高は5.3~6.3mを測り、全体の傾斜は東南東から西北西へ緩やかな勾配となっている。現在の多々良川との比高差は約1.5~2mであり、多々良川の氾濫を受け易い立地となっている。

本遺跡の営まれた頃の旧海岸線については、多々良川河口部においてかなり深く湾入していたことが想定されている (Fig. 3) ^(註1) が、それによると現在よりも1kmほど河口近くに位置していたことが考えられている。当時の遺跡の立地条件と周辺の景観復元にあたって、この点は重要な要素になるものと思われる。

周辺の遺跡と歴史的環境 (Fig. 1)

本遺跡の周辺には、博多湾沿岸における柏屋地域の、古代から中世における歴史的な特性を



Fig. 2. 遺跡遠景 (航空写真、西から)

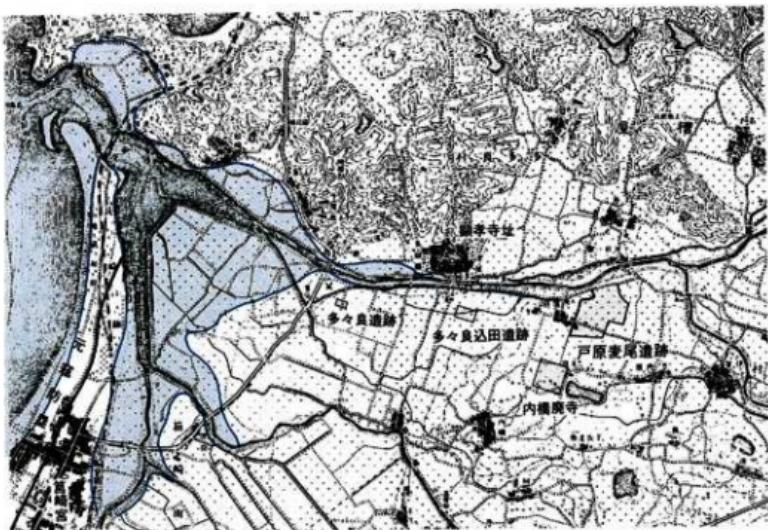


Fig. 3、戸原麦尾遺跡の位置と旧海岸線の復元（1／40000）

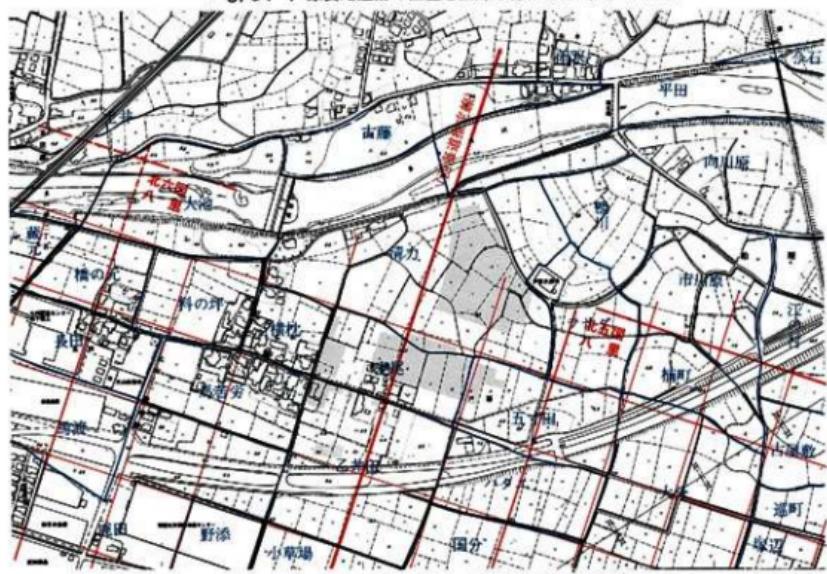


Fig. 4、条里の推定復元と周辺字名（1／10000）

物語る遺跡が多く分布しているが、調査例が少ないために不分明な部分が少なくない。以下調査された遺跡を中心に、周辺遺跡について概観しておきたい。

古墳時代においては名島古墳、天神森古墳、王塚古墳(12)等の前方後円墳を初めとして、都木神社境内の前方後方墳などが点在している。名島古墳は全長が約60mで楔形に拡がる前方部を有することが確認された。内部主体は粘土構造とされ、三角縁神獣鏡が出土している。また天神森古墳は推定全長約60mほどの墳丘を持ち、三角縁神獣鏡1面、盤龍鏡1面が出土している。これらはこの地域が早い段階から幾つ地元との強い結び付きがあったことを窺わせている。

奈良から平安時代の遺跡は、多々良込田遺跡(2)、蒲田遺跡D地区、水ヶ元遺跡、柏原町駕与丁廃寺、内構廃寺などがあげられるが、調査例は少なく当該期の遺跡の実態についてはほとんど分からぬ状況である。この中にあって多々良込田遺跡の数次にわたる調査では、多々良川下流域の古代条里の復元と検証に関わりながら、「夷守駅」(7)の推定とその実態の解明にあたって貴重な成果を上げている。なお柏原郡にその名残をとどめる条里の復元研究は、鏡山猛氏・日野尚志氏らによって行われている。日野氏によると、柏原郡の条里を7つの条里区にわけ、2つの条里区についてその坪並を復元すると共に、西海道の復元が試みられた。この復元案によると、本遺跡が位置する多々良川下流域の条里地割はN-20°-Eの地割方位のもとで、北西隅から平行式に南東隅へ数える坪並が考えられていることから、後述する第Ⅱ区の場合、柏原西郷北六園八單の11坪に位置することとなり、さらに西海道の推定線にその西側で接しているということになる。

古代末～中世にかけての遺跡で調査が行われたものは少ない。近接するところではまず多々良遺跡(3)が上げられる。この遺跡では本遺跡と同様、溝で区画された方形区画を持つと思われる集落跡が検出されていると共に、輸入陶磁器や、国内産陶器類が多く出土している。また蒲田遺跡D地区でも、ある一定の区画と思われる範囲に建物群が確認されている。この遺跡では帯状に続く礫群が、本遺跡の第Ⅰ区で検出された礫群と類似している点で注意される。

多々良川右岸に、本遺跡と対峙して顯孝寺跡(6)が位置する。これは大友宗良によって14世紀前半に建立されたもので、一時期大友氏の対外的な通商拠点となっていたと考えられている寺院でもあり、その影響を少なからず本遺跡に及ぼしていたことも考えられよう。

なお文献上では、文治3年(1187年)宮崎宮大宮司泰親重が所領の返還を求める際に、作成された大宮司分坪付や、文明19年(1477年)の宮崎宮領坪付帳等に戸原およびその周辺の地名などが散見でき、本遺跡そのものの地名は出てこないものの、本遺跡ならびにその周辺は古代末から中世にかけて宮崎宮との関連が強い地域であったことが窺える。

(注) 1. 中山平次郎 1925 博多湾の海底線 地理 3-1. 梅田純一 1984 光庭開拓と博多の地形. *Museon Kyushu* 13

2. 福岡市教育委員会が昭和61年度に調査 昭和61年度西日本史学会考古学部会で概要報告. 沖崎源二氏より御教示.

3. 下野義信 1977 萩古宇・御前山遺跡 施設の構造と礫の組合をかねて

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1号

4. 和田市教育委員会 1980 多々良込田遺跡目

福岡市埋蔵文化財調査報告書第33号

5. 福岡市教育委員会 1975 蒲田遺跡 九州報貢済通志関係埋蔵文化財調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第33号

6. 福岡市教育委員会 1985 多々良込田遺跡目

福岡市埋蔵文化財調査報告書第12号

7. 傳山信 1955 宮崎県下の施設

伊賀人学習研究会研究叢書 26 (1)

8. 日野尚志 1976 鹿児島町・駕与・柏原・御内四郷における条里について

福岡市埋蔵文化財調査報告書第20号

9. 福岡市教育委員会 1972 多々良遺跡

10. 宮崎宮 1970 宮崎宮史料、竹内義三編 角川日本地名辞典「40 福岡県」 角川書店

III 発掘調査の記録

(1) 発掘調査の経過と概要

調査の期間 発掘調査は昭和59年10月11日から62年10月15日までの約3年間にわたり実施した。この間には約13ヶ月ほど中断せざるを得なかった期間があるため、実質的には約2年間を要した。調査経過のおおまかな流れはTab.1を参照されたい。

調査区の設定 試掘調査の結果では、建設予定地内（約80000m²）における遺構の広がりは大きく4地点に分かれてまとまることが明らかになり、それらの総面積は約23600m²が予想された。建設予定地内の建造物の位置、建設工事と調査行程との競合等を調整し、便宜的に北東部から第I～IV区とした。さらにそれぞれの調査区を調査年度ごとに細分し、例えば第Ia区、第IIIb区と呼称することとした。各年度毎に数地点での建設工事が行われ、それらに先行しながらの調査だったために、結果的には一つの屋敷地を寸断しながらの調査となってしまった。特に第II区においては、幸い小区画ごとに調査区が設定できたものの、屋敷地全体のイメージは図面上でしかできない。なお調査が進むにつれて遺構の平面的な広がりが当初予想されたよりも広範にわたって遺存していることが認められたため、最終的な調査面積は全体で32670m²となった。

遺跡の概要 建設予定地内では、古代から近世までの時期にわたる遺構が大きく4地点にまとまって確認された。遺跡の主要な時期・構成内容は鎌倉から室町時代の屋敷地（居館、集落）、墓、水田跡である。当時の遺構構成がほぼ一つのセットで検出できた数少ない例と言える。

第I区の北東部では一辺が40m程の隅丸方形の範囲に掘立柱建物や井戸、土壙、溝状遺構、木棺墓などがまとまってみられ、それらの周囲を、並行する2条の溝が巡っていることが確認された。遺構の在り方から土塁を巡らした屋敷地と判断された。第III区では先述した条里の坪並に合致して東西に約100m、南北に50mの範囲に掘立柱建物、井戸などの遺構が集中してみられた。これらの遺構群の周囲には溝が巡り、さらに7～8の小地区割りが行われていた可能性がある。ただし一時期の構成ではなく少しづつ拡張して行った事も考慮される。第IV区では古代の大溝（板塀が出土）、中世から近世初期の掘立柱建物、井戸、土壙、溝などが検出された。近世の遺構群は現在の広田の集落と歴史的に関連するものと思われる。第IV区では古代末から中世以降の水田址の一部が検出されたほか、性格不明の円形竪穴遺構が群集して検出された。

注1 本書では、掘立柱建物、井戸、座廻塙などの遺構およびそれらと有機的な関連をもって配されている溝状遺構などの遺構が集中して分布する客観的な範囲を「屋敷地」と呼ぶ。



Fig. 5. 作業風景(第I区開始時・南から)



Fig. 6. 戸原麦尾遺跡調査区設定全体図 (1/3000)

0

100m

調査区	調査実施面積(m ²)			総面積 (m ²)	調査期間	備考
	59年度	60年度	61年度			
I 区	a 7,000				559, 10, 18~60, 3, 1	
	b 2,000	6,000		10,000	561, 1, 27~61, 8, 12	
	c 1,000				561, 7, 15~61, 8, 12	
	d 2,000				562, 7, 13~62, 9, 30	
II 区	a 2,000	2,500			560, 2, 5~60, 4, 30	
	b 2,000				560, 4, 9~60, 6, 27	
	c 2,000				560, 8, 22~60, 10, 30	
	d 2,200				561, 4, 23~62, 8, 30	
III 区	a 200				559, 10, 16~59, 10, 22	
	b 1,500	150		2,650	560, 2, 15~60, 4, 5	
	c 800				561, 8, 25~61, 11, 22	(A-Cトレンチを設定)
IV 区	a 70				559, 10, 19~59, 10, 29	
	b 1,250			1,250	561, 9, 3~61, 11, 22	
総面積(m ²)	10,720	8,650	9,050	4,200	32,670	

Tab. 1. 戸原麦尾遺跡調査経過表

(2) 第Ⅰ区の調査

概要 第Ⅰ区は浄水場敷地の北東部にあたり、多々良川左岸に近接する地点に位置している。調査区の面積は約18000m²で、a～dの4つの小区に分けて調査を行った。遺構は多々良川の氾濫によって形成された沖積高地上に特に集中してみられる。第Ⅰa・c・d区では旧河川を挟んで東側に集落址の一部と思われる掘立柱建物、土壙、木棺墓が、西側には方形の竪穴遺構がそれぞれ群をなし、集中して検出された(Fig. 7・24)。遺構は東側のほうが残りよく、西側へ行くほど後世の削平が著しい。全体的には遺構の残りはあまり良くない。掘立柱建物の分布は調査区を越え、東側にさらに拡がることが予想された。旧河川西側(Ⅰa区西側～Ⅰd区東側)では2×2m前後の方形の墓址と思われる土壙がある一定の配列で分布しており墓域の存在が予想された。第Ⅰ区の北側にあたる第Ⅰb区では、旧自然堤防の名残を若干とどめる小高な地形があり、この地点上において、約50×50mの範囲で遺構がかなりの密度で検出された(Fig. 8)。検出された遺構は、掘立柱建物、井戸、土壙、木棺墓、性格不明の竪穴遺構(廐棄壙も含む)、鍛冶炉と思われる竪穴遺構などで、これらの遺構を取り込んで、2条の並行する溝状遺構が一辺40～45mを測る隅丸方形状に巡っていることが確認された。溝と溝との間には遺構の空白部分があり土壙等の何らかの施設があったと考えられた。

出土遺物は、柱穴、土壙、井戸、溝などから土師器(皿・杯・鍋)を主として、須恵質土器(捏鉢・壺)、滑石製石鍋等の調理、供膳用器のほか、砥石、土錘、台石、輸入陶磁器(白磁碗・皿・青磁碗・皿、青白磁合子、褐釉四耳壺)などや、貨銭、鉄滓等が多く出土している。傾向として輸入陶磁器の全体に占める割合が高い。木棺墓(SK02・03・1677)からは、青銅製柄鏡、六花鏡、ガラス製小玉等の類例の少ない副葬品も出土し、被葬者の性格づけにあたって好資料となった。



Fig. 7. 第Ⅰa区発掘状況(東から)



Fig. 8. 第Ⅰb区発掘状況(西から)



Fig. 9, 第I b区遺構分布図(部分1/300) (遺構名は文中で記述したもののみ表記)

掘立柱建物 (Fig. 7~11)

第 I 区において掘立柱建物は、44 棟検出されている。建物の分布は、図面操作によってさらに増えることも予想されるが、I a 区の東側で 9 棟、西側で 1 棟、b 区で 33 棟、c ~ d 区で 1 棟（計 44 棟）が確認されている。b 区の建物は平面的に、また方向性の面でもある一定のまとまりが窺われるが、a・c・d 区においては散在的な分布の在り方を示している。

建物の規模は 2×3 間（21 棟）がもっとも多く、 2×2 間（4 棟）、 2×4 間（10 棟）、 2×5 間（4 棟）、 1×3 間（3 棟）、 3×5 間（2 棟）といった間取りがある。

これらの建物は、それぞれの柱穴からの出土遺物、切り合ひ関係から見ると、13世紀の前半から14世紀前半までの間にさるもののが主体を占め、15世紀以降のものが若干見受けられる。

各造構の並行関係および時期の前後関係の検討は十分ではないが、I b 区では 2×4 ないし 2×5 間の建物（東西棟）を中心にして比較的規模の小さな建物を鍵型に配す場合と、規模の異なる建物を直列に配す場合があり、いずれも周辺に付属屋、井戸、

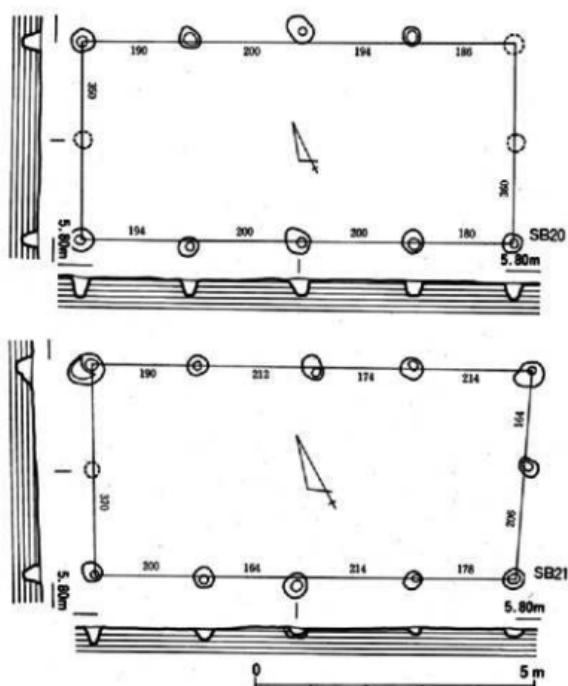


Fig. 10. 掘立柱建物平面および断面図 (1/100)

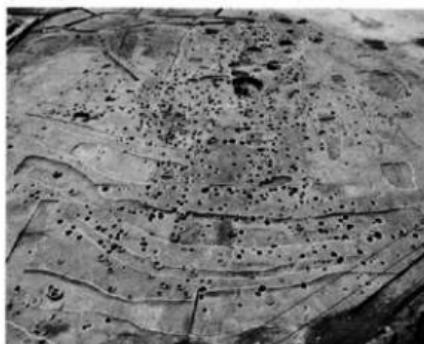


Fig. 11. 第 Ib 区中央部造構分布状況 (東から)

廃棄場などを設けている状況が看取出来る。

屋敷地内における各家屋および生活関連の施設の配置の在り方を考えるうえで貴重な事例であると思われる。

竪穴造構 (Fig. 12・13・22)

ここで竪穴造構と呼ぶのは、明確に性格づけが可能となった土塙墓、木棺墓、戸井以外

の竪穴で、その機能・用途が明確でないもの Fig. 12、第1b区中央部竪穴造構切合状況(南から)を指している。したがっていくつかの性格の異なる遺構を包含している可能性がある。これらは、平面形、規模、埋土、遺物の堆積状況など多様性に富んでいるが、大きく6つのタイプに分けられる。1類：平面形は円形、不整な円形、もしくは梢円形となり、断面浅皿状のもので、土器や石などが投棄された状態で多量に出土するもの (Fig. 12)。2類：平面形は長梢円形で、溝状のプランをなし、断面U字形のもので、遺物が多量に出るものとそうでないものがある (Fig. 22-SX4466)。3類：平面形は隅丸の長方形で、長さ70×幅50cm前後の大さを測る。床面、壁が熱を受け赤くなっていると共に、木炭片や、焼土、焼石を多く含む (Fig. 22-SX1733)。4類：平面形はやや寸ずまりの長方形で、きっちりとした掘り方を持ち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘り方は長さが1.5~1.7~8cm、幅が1.2~1.4mを測り、遺物はほとんど出ないものや、土師器皿の完形品等が出土するものなどがある (Fig. 17~20)。5類：平面形は正方形や長方形で、長さは2~3m、幅は1.5~2.5mを測る。やや大きな掘り方で、床面に拳大から人頭大の転轍を數き詰めたものや、無遺物のものなどがある (Fig. 22-SK17)。これは特にI a区西側に多く見られた。6類：平面形は隅丸の長方形で、長さは4~5m、幅は3~4mの長大な竪穴である。床面に柱穴を持つもの (Fig. 33・34)と持たないものがある。遺物は比較的多

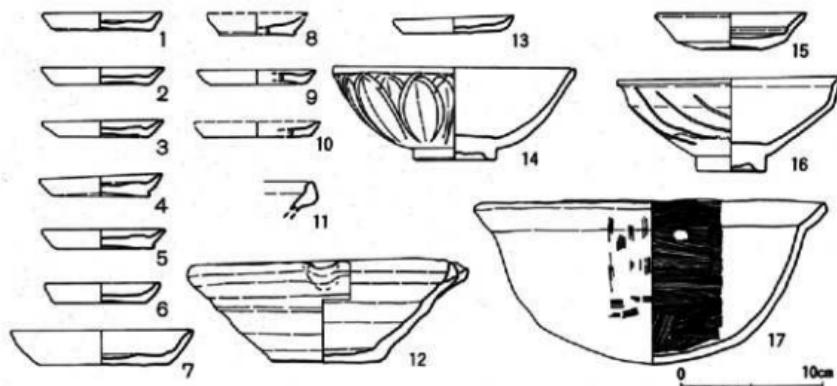


Fig. 13. 柱穴、竪穴造構出土土器実測図 (1/4)

(1~5 : SK33
6~7 : SX3366
8~11 : SX25
12~17 : 柱穴)

く出土するが、ほとんどが破片である。なお I 区で検出されたもの (SX1679・1728) には柱穴は認められなかった。

これらの竖穴遺構の性格については、今後十分な検討を要するが、1・2・5 類は廃棄用の竖穴、3 類は鍛冶に用いられた竖穴、4・5 類は土塙墓もしくは墓制に関連した遺構の可能性がある。6 類は廃棄用の竖穴として結果的には用いられるが、本来は半地下式構造の木造の家屋だったものもあると思われ、他の遺跡の類例との比較検討が必要であろう。

期間については、掘立柱建物の存続期間と並行するものと思われるが、細かな時期区分は今後の課題であり、本報告時に行いたい。

溝状遺構 (Fig. 7~9・14)

第 I 区では溝状遺構は、61 条検出されている。断面形は V 字形のものが a 区で 1 条検出された (SD01) ほかはほとんどが浅皿もしくは U 字形である。各遺構とも全体的にかなりの削平を受けており残りは悪く、本来の形状はほとんどとどめていない。現存幅は 0.30~2.60m まで大小様々であるが 0.50~1.0m のものが最も多い。深さは 0.15m~0.50m 前後を測る。

ほとんどの溝が水田に伴う畔溝と考えられるなかで、第 I a 区で検出された SD01 や I b 区の SD1675・2404 (07)・2406・3075・3136 は、掘立柱建物などの遺構群の周囲を巡る特徴を持っている。これらは屋敷地を画するとともに機能的には排水施設をも兼ねていたものと思われる。特に注意されることとして、第 I b 区の東南から南西部にかけて断続的ではあるが、SD1675 と 3136、SD2404 と 3075 が並行して巡り、しかも溝間に遺構が存在しないことがあげられる。断定することは難しいが、溝間に土星状のものがあったことも考えられよう。遺構の切り合い関係では SK33・SX3137 → SD1675・2404・3075 → SX21・22、SE3115・3086となっ



Fig. 14. 第 Ib 区北東部溝状遺構検出状況(南西から)

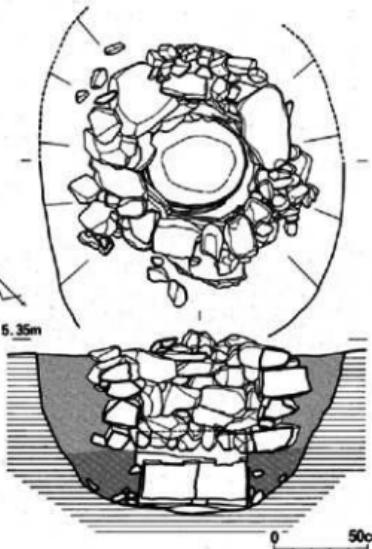


Fig. 15. SE3086 平面および断面見通し図 (1/30)

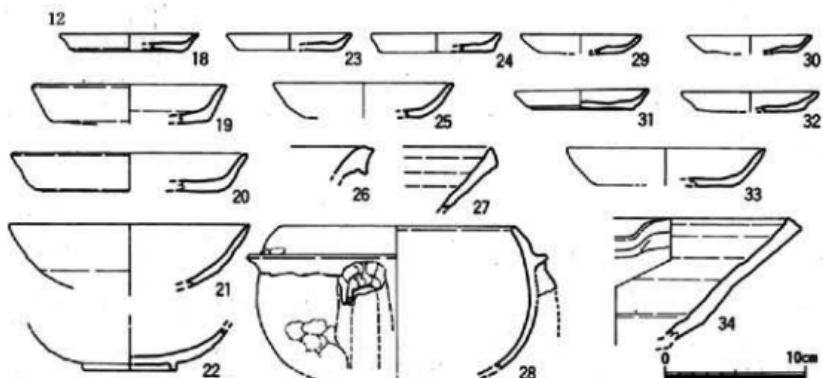


Fig. 16. 井戸・溝出土土器実測図 (1/4) (SE3533: 18~25
SE2988: 26~28
SX3137: 29~34)

ている。SK33・SX3137はその出土遺物 (Fig. 22) からは13世紀前半以降、SX21・22、SE3086は明確ではないが15世紀まで下る可能性がある。したがって並行して巡る溝の時期はこれらの期間の範囲に時期比定ができる。

井戸 (Fig. 15・16)

第I区において井戸は20基検出された。井戸の種類は、井戸掘り方のみのもの12基、井筒が曲げ物のもの4基、同じく木桶のもの4基である。井戸の分布状況はI b区において特に集中してみられ、第I a区の東側にまとまってみられた。さらに大きなまとまりのなかにあって、地下水脈と、建物等の配置上の関係からと思われるが、一定の地点にブロックを形成していることが認められた。井筒の規模は、井筒が残っているものでみると、直径が40~50cm前後、深さが50~70cmほどの大きさである。傾向として、井筒に木桶を用いたほうが、曲げ物を使用しているものに比べて掘り方を初めとして規模が大きく、貯水量も多いと思われる。検出された



Fig. 17. SK02遺物出土状況(西から)

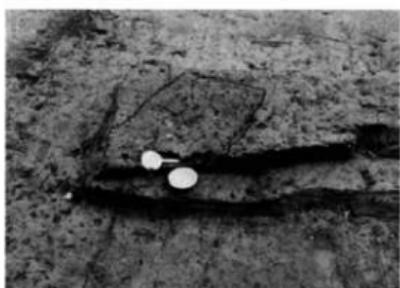


Fig. 18. SK03遺物出土状況(北から)

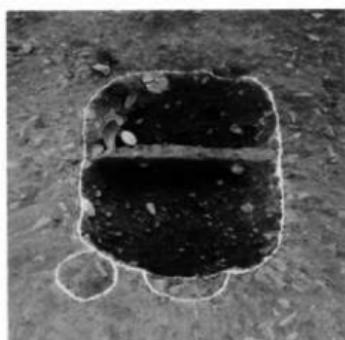


Fig. 19. SK1677遺物出土状況(北から)

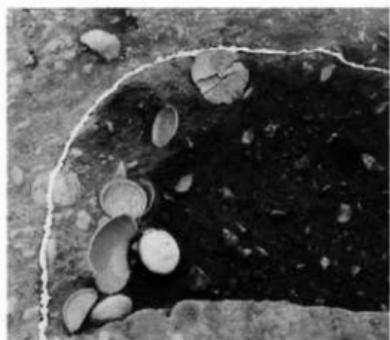
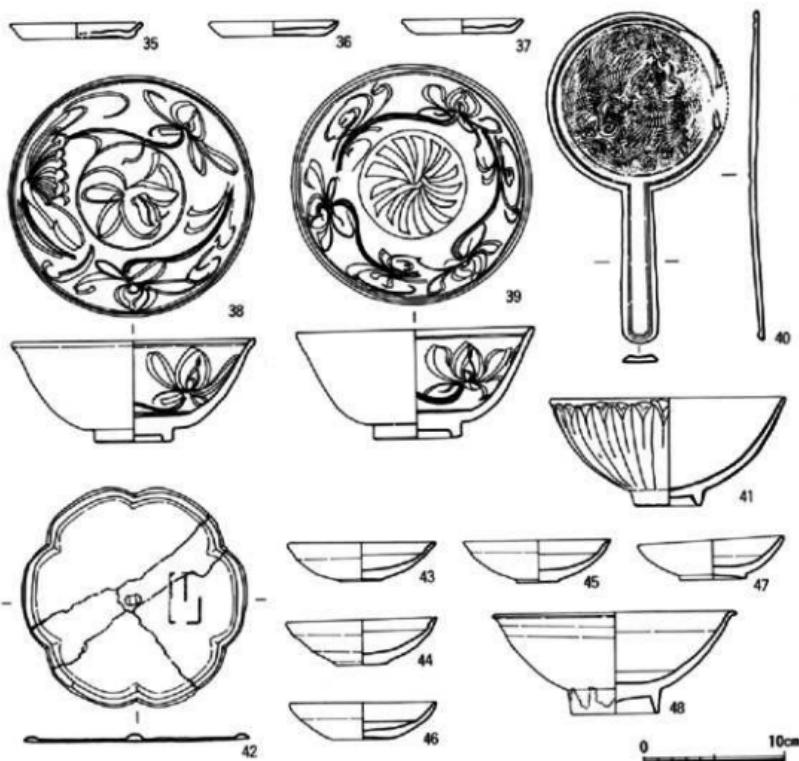


Fig. 20. SK1677遺物出土状況(部分拡大・北から)

Fig. 21. SK02-03-1677出土遺物実測図 (1/4) (SK 02 : 35-36)
SK 03 : 40-41
S 1677 : 42-48)

0 10cm

井戸がすべて生活用水のためのものとは言えないが、少なくとも I b 区内で検出されたものは、屋敷地内において他の施設との関連のもとで一定の場所を占地しながら利用されていたと思われる。

以上の井戸の時期は、SX03 (I a 区)、SE1736 (I b 区) 等の12世紀まで遡るものを初めとして、13世紀後半～14世紀を中心とした時期におさまり、15世紀まで下るものもある。

土壙墓・木棺墓 (Fig. 17・22)

第 I 区において明らかに墓址と判断されたものは、37基である。ただし先述の堅穴遺構中にも墓と思われるものが含まれているので実数はさらに多いものと思われる。これらの墓址の分布は大きく 3 つの範囲にまとまる。一つは SK02・03 (Fig. 17・18) 等を含む、調査区東側のグループ、一つは SK1677 (Fig. 19～21) を含み、I b 区の掘立柱建物の集中している地点と重複するグループ、一つは I a・b 区にまたがり分布するグループで、先述の堅穴遺構 5 項も比較的まとまってみられる特徴がある。ただしグループ内での分布の密度はそう高くなく切り合いも多い。墓址に伴い送葬に関連したものと思われる遺構に SX4466 (Fig. 22・Id 区) や SX4358 (Id 区) 等の土師器皿、杯を多量に投棄した堅穴遺構がある。

これらのグループ間の関係や、グループ内での墓域の形成過程については、隣接して存在する

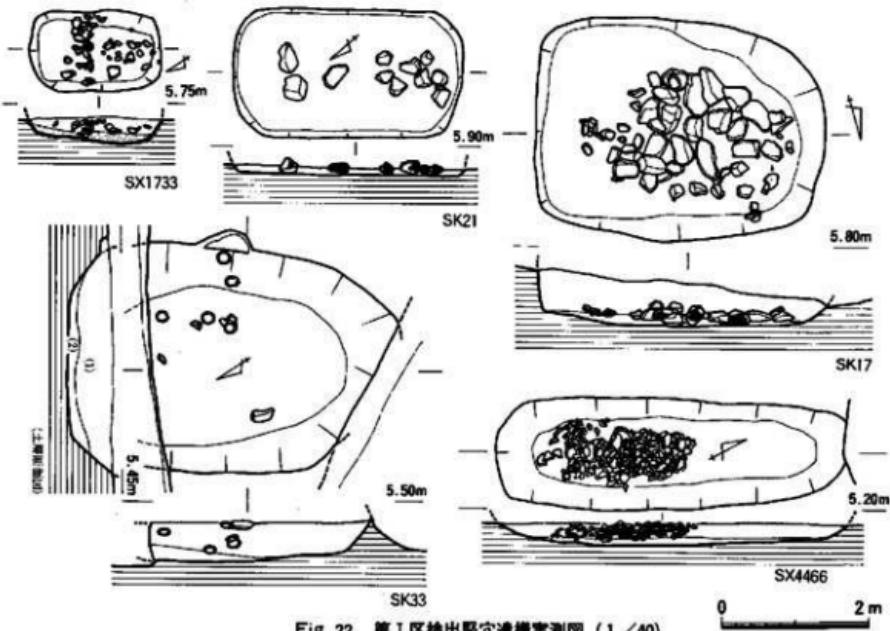


Fig. 22. 第 I 区検出堅穴遺構実測図 (1 / 40)

集落との関係もあり、本報告時に十分な検討を加えたい。副葬品の在り方では、SK03・1677のように鏡と輸入陶磁器を副葬するもの、SK02のように輸入陶磁器と土師器皿を組み合わせるもの、SK33のような土師器のみのものや刀子のみのもの、副葬品を持たないものなど、副葬品の質的な内容の異なりが看取できる。これらの異なりが、すぐさま被葬者の社会的な身分の差異を表現しているとは言えないものの、特出した内容の副葬品そのものは、SK02・03・1677の被葬者の性格づけと、掘立柱建物の集中する屋敷地の評価にあたって、特に重要な鍵となるものと思われる。なおSK1677は12世紀半ば以降、SK02は13世紀前半以降、SK03は14世紀前半以降の所産と考えられる。他の墓も時期的には13世紀を中心としながら、これらの時間幅におさまるようである。

その他の遺構と遺物

その他の遺構としては、第I a区中央とb区北側に位置する2本の旧河川内で、流れに直交する杭列が3条検出されている。(SA01・02・07)。いずれも井堰として設けられたものと思われる。SA01・02は、旧河川からの出土遺物が11世紀頃まで遡るものもあることから、おそらく当該地への入植の初期の頃のものである可能性がある。旧河川の復元を行うと共に、他の調査区で検出された杭列も合わせて考えると、多々良川左岸に形成された低湿地状の氾濫原を水田化していった過程を明らかにしうる可能性がある。

柱穴内に、おそらくは再利用のため柱を抜いた後と思われるが、土師器皿や土師質の土鍋、瓦器碗、青磁皿・椀等を埋置するものがI b区では目立った(SP2964・2350など)。また貨銭を埋納するもの(SP1742)もあり、中世の呪の一端を窺い知ることが出来る。

出土遺物では、木棺墓から出土した青銅製の柄鏡、六花鏡およびこれらと共に伴した輸入陶磁器が筆頭される(巻頭図版1・2)。柄鏡は、その鏡背の内区に繊細な線で描かれた陽刻の鳳凰をあしらっている。鏡面は鏡メッキが施されており、焼銀様の純い光沢が部分的に残っている。埋納時には、布で包んで納めたものと思われ、柄の末端に繊維の一部が付着している。一般には高麗鏡の範疇に含まれているものであるが、類例は非常に少なく貴重な出土例となった。

六花鏡は鏡背に銘帯があるが、その残りは

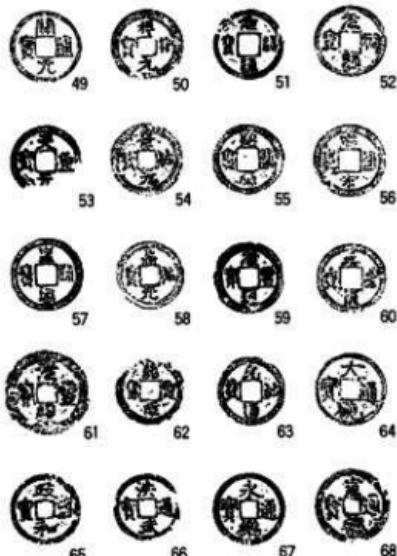


Fig. 23. 第I～III区出土の貨銭拓影 (1/2)

非常に微弱で、読みとりは不可能である。宋代の湖州鏡と思われるが、銘帯や、縁の状況から見て、踏み返しの可能性もある。

これらの他、東播磨地方産の須恵質土器（壺・片口等）、常滑窯の壺等の日常雑器や、繩の羽口、鉄滓（鍛冶滓と思われる）、北宋銭を主とした貨銭（Fig. 23）が62点出土している。

遺物の上からは当時の物質的広範な流通の実態の一端について知ることが出来るとともに、それらを受容していた者の日常生活の一端を窺い知ることができよう。

小結

第I区を特色づけるものとしては、a～b区にかけて検出された、並行する2条の溝によって方形に区画されている掘立柱建物群とそれらに伴う生活関連の遺構群で構成された屋敷地があげられる。遺物の十分な検討が終っていないためにやや不正確さは残るが、屋敷地の営みの痕跡は、平安時代後期の12世紀代から見られ、鎌倉時代を経て室町時代の始め頃にあたる14世紀の前半頃までと、室町時代の後期にかかる15世紀代のものがある。これらの全期間を通じて屋敷地が利用されていたかどうかについては今後検討すべき課題である。また、ある一定の時間毎における家屋や遺構群の配置の在り方、さらには想定される土星の出現時期がどの段階からのものなのかなど検討課題は多く、これらについては本報告時に行いたい。

また屋敷地に隣接して分布している墓址群は、時期的には各墓域間ならびに屋敷地とも並行して営まれたものである。墓域としては密度はそう高くないが先述の3つのグループの分析を通して、本遺跡の古代末から中世にかかる墓制の在り方を知りうるものと思われる。



Fig. 24. 第I-d区発掘状況(北から)

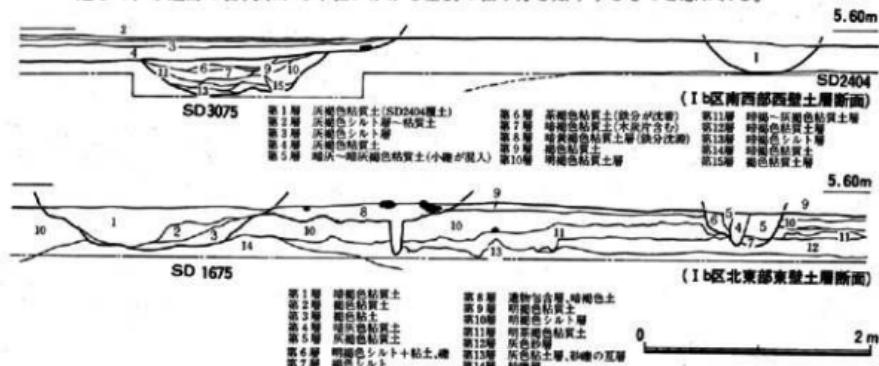


Fig. 25. 第I-b区南西部および東南部土層断面図(1/50)



Fig.26. 第1区測量分布図 (1 / 300) (測量点は文中で記述したもののみ表示。アーチ記号は印字用)

(3) 第Ⅱ区の調査

概要 第Ⅱ区は浄水場敷地のほぼ中央部にあたり、管理本館棟の位置する地点である。多々良川左岸からは、約250m南に離れており、周辺の標高は5.60~5.80mを測る。この調査区は日野氏が推定された西海道の推定線上に位置していることから、駅路の存否も調査にあたって注意された。調査面積は約10700m²でa~dの4つの小区に分けて調査を行った(Fig.26~30)。この区の範囲はちょうど旧自然堤防にかかっている。遺構はこの旧自然堤防上で東西約100m、南北約50mの範囲内に集中して見られた。

検出された遺構は掘立柱建物、井戸、土壙、木棺墓、性格不明の堅穴遺構、杭列(井堰)、溝状遺構等で、遺構の組み合わせは第Ⅰ区とほとんど変わらない。これらの遺構群を取り込み、長方形に画する溝も検出されている。ただし第Ⅰ区と異なり溝は1条のみである。この区画は東西に約100m南北に約50mを測る規模で、第Ⅰ区で確認されたものの約2倍ほどの面積がある。この区画は多々良川左岸に展開する条里の坪並に合致しており、おそらくは当時の条里景観に規定され屋敷地が設定されたものと思われる。なお現在の当該地周辺の水田区画の景観は、少なくともこれらの遺構群の残された時期まで遡ると言えよう。

出土遺物は土師器皿・杯・土鍋を中心として須恵質の壺・鉢(東播系、亀山?、常滑)等の日常雑器のほか、第Ⅰ区において輸入陶磁器では白磁が多かったのに比べ龍泉・同安窯系の青磁や青白磁、陶器が目立つ。また第Ⅰ区で貨銭が多く出土したのに比べ第Ⅱ区では数点しか出土していない。逆に第Ⅰ区でみられなかった管状土錐がこの区では300点近くも出



Fig.27.第Ⅱa区発掘状況(北から)



Fig.28.第Ⅱb区発掘状況(北から)



Fig.29.第Ⅱc区発掘状況(西から)



Fig.30.第Ⅱd区発掘状況(東から)

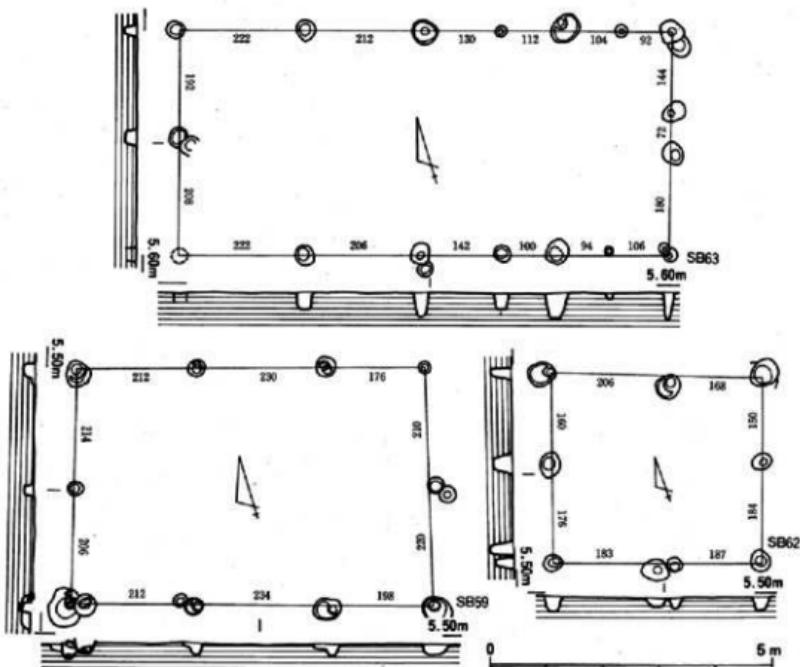


Fig. 31. 挖立柱建物平面および断面図 (1/100)

土するなど遺物の内容に若干の異なりがある。

掘立柱建物 (Fig. 26・31・32)

第Ⅱ区では掘立柱建物は、56棟検出されている。I区でもそうであったように、この区でも 2×3 間の規模のものが数の上では主となり (40棟)、 1×5 間1棟、 2×2 間2棟、 2×4 間7棟、 2×5 間1棟、 3×3 間3棟、 1×4 間1棟などがある。これらの建物は方向性をほぼ同じくしながら、7~8ヶ所にまとまっているとともに、やや細い溝によって小さく画されているという分布の在り方を示している。各建物の細かな時期差については、検討が十分ではないが、調査の所見では、中央部のコの字形に東へ張り出す溝 (SD36) を境



Fig. 32. 第Ⅱb 区掘立柱建物検出状況(北から)

として東側がやや時期的に新しく形成されたものと考えている。なお建物群の構成が西側のものはそのままで拡大したのか、あるいは建替の累積の結果として少しづつ移動したものが拡大したかのように見えるのかという点に付いては今後の検討課題である。

掘立柱建物の時期については柱穴からの出土遺物や切り合い関係から13世紀半ばもしくは後半以降から14世紀前半までと、15世紀にかかる時期のものが一部ある。ただし今後の整理によって若干の時期観の変更があり得ると思われる。

竪穴造構 (Fig. 33-35)

第II区でも、第I区で類別された竪穴の各種のものが検出されている。ただし灼跡と思われる3類はこの区では確認されておらず、またI区にはなかった種類の竪穴造構が見られる。廃棄用の竪穴と思われる1類に分類した円形もしくは指円形の竪穴は区画の外に多く分布している。特に西側と東側の一角にまとまりが見られ、屋敷地の外で生活残渣を廃棄したものと想像される。墓址と考えられる4類はこの区では検出例が少なく(13基)、東側と西南隅にまとまって検

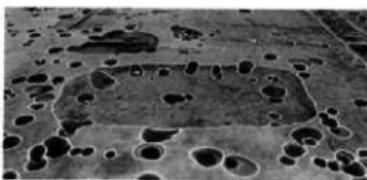


Fig. 33. SX115完掘状況写真(南から)

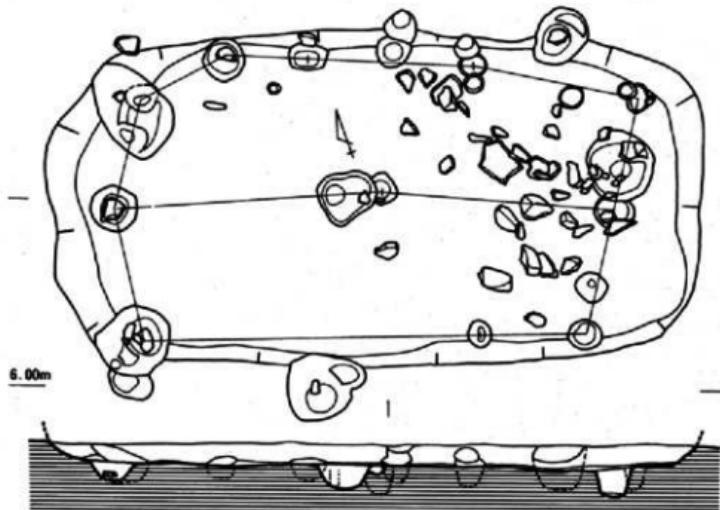


Fig. 34. SX115平面および断面図 (1/50) 0 1m

出されている。十分な分析は行っていないが、こういった分布の在り方から見ると、屋敷地内における、生活空間の利用の形態の一端が窺われる。

II区で確認された竪穴のうちI区でみられなかったものがある。5類

としたものに比べて幅が

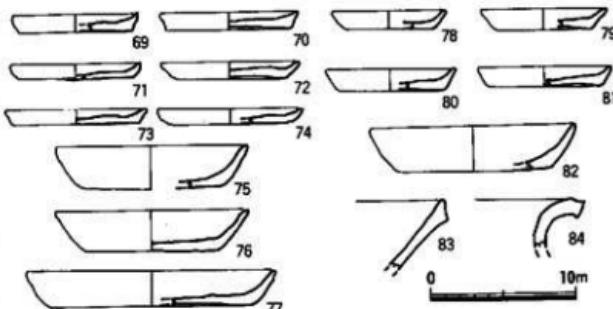


Fig. 35, SX115-116出土土器実測図 (1/4) (SX115: 69-77)

(SX116: 78-84)

狭く、大きさは長さが4m前後、幅が1.5~2mほどである。調査区の東南側で4基検出されており、これらは一応7類と呼ぶことにする。埋土は褐色~灰褐色の粘質土がほぼ単層で堆積しており、遺物の出土は少ないという共通性がある。SX4311 (Fig. 30) では大量の木炭片、糞灰が出土している。これらは溝ないし、畦畔と思われる高まりに隣接、並行して見られるところから水田とかかわる遺構ではないかと思われるが、その機能については明確ではない。

6類とした竪穴がこの区では7基検出されている。遺存状況が良好なものにはSX140・142・115・116の4基がある。SX115・116には柱穴が伴っており、特にSX116床面には焼けて倒壊したと思われる材木が見られた。竪穴住居址に共通する遺構の構成を持っている。6類が機能的にどのような性格のものだったかは今後検討せねばならないが、半地下式の床構造を持つ木造家屋であることは間違いないものと思われる。ところでこの6類とした竪穴遺構の分布は掘立柱建物の分布と重複し、特に密集している地点に近い箇所に隣接して分布している傾向が認められる。掘立柱建物と、半地下式の家屋が機能、用途を異にしながら隣接して立ち並んでいたことが想定できるかも知れない。

溝状遺構 (Fig. 30)

第II区で検出された溝状遺構は、基底部のみしか残っていないものも含め45条である。断面形状はほとんどが浅皿もしくはU字形で、後世の削平をうけ、全般に残りはあまり良くない。現存の幅は0.30~1.50mで、深さは0.10~0.30m程の幅にいずれもおさまる。溝の形状はほとんどが直線的である。SD25~27・48は、おそらく旧地形の形状に制約されたものと思われるが、緩やかな弧を描いて東西に走っている。またこれに直交してSD18・36・43・50・53・55~58・4284・4329は南北に走っている。平面形で特徴的なものはSD36である。本來は直線的であったものが「コ」の字に張り出す形で作り替えられている。流路の変更というより、屋敷地の構造の変化に伴う作り替えとも思われる。この溝からは14世紀前半代の遺物と共に、多量の木炭片や焼土が層を成して出土している。

掘立柱建物などの遺構群に伴うと思われるものは、SD18・25(?)・29・36・37・48である。

また後世の水田の畔溝と思われるもの(SD4284や4329など)もあり、小区画の有無、またそれらの構成については慎重な検討を要すると思われる。掘立柱建物の項でも述べたように、建物を初めとする遺構群の形成過程の分析とともに、屋敷地の展開の過程については本報告時に検討したい。なお、SD30の位置する南北のラインは、多々良川左岸に展開する条里の坪境に合致すると共に、西海道の推定線もある。調査においては、駅路に関する遺構等は検出されていない。

井戸 (Fig. 36・37)

第II区において井戸は38基検出された。遺存状況は、井戸掘り方のみのもの23基、井筒が曲げ物のもの14基、同じく木桶のもの1基である。木桶を用いたものはまだあったと思われるが、この区では曲げ物を用いたものが目立つ。井戸の分布状況は、第II c～d区にあたる調査区の東南側と、1類に分類した竪穴が集中している西側に多く見られるほか、特徴的な分布の在り方として、6類とした竪穴遺構と同様に、掘立柱建物の集中する地点に近接して点々と分布するものもある。東南側の井戸は遺構検出面の下部に流れている旧河川(水脈)に規定され、一定の位置を占めるようになったと思われるが、点在する井戸については、個々の建物との位置的な関連も注意される。井戸の規模は

Fig. 36. SE04井筒内遺物出土状況(北から)

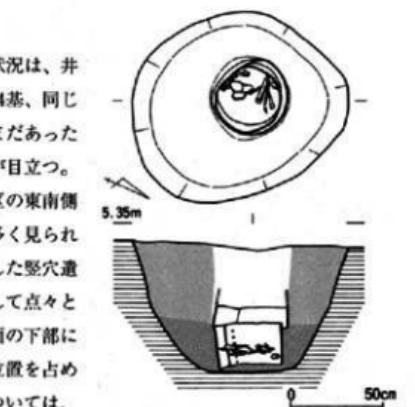


Fig. 37. SE04平面および断面見通し図(1/30)

SE04・08(井筒は曲げ物)が直径40cm、高さ35～38cmで最も小さく、SX59(井筒は木桶と思われる)が直径60cm前後を測る。木桶を用いた井戸のほうがこの区でも掘り方などの規模は大きいようである。

井戸の埋め戻しに伴う祭祀行為を物語る例がSX152で確認された。井筒は曲げ物を用いているがその遺存状況は悪い。埋め戻すにあたって一本の竹を井戸掘り方の中央からやや南東側に、ほぼ垂直に立てて土を覆っている。埋土の中位には木炭片が薄く混入する土層も見られた。

埋め戻しに伴うものかどうか明らかではないが、図示したSE04では土師器杯と櫛が井筒の基底部で検出されており、何らかの呪、あるいは祭祀が行われたものと思われる。中世の井戸

にまつわる祭祀の一端が窺える出土例である。

土壙墓・木棺墓

第Ⅱ区では明確に墓址と思われる遺構は13基しか検出されていない。またそれらの中で木棺墓と思われるのはSX109のみで、他は土壙墓と思われるが遺存状況も悪く明確ではない。副葬品は、土師器杯や皿で、第Ⅰ区と比べて副葬品は貧弱である。



Fig. 38. 第Ⅱd区杭列SA11・旧河川検出状況(東から)

これらの墓址は先述したように屋敷地の東側と西南部に集中してみられるほか、残りは区画内に数基点在しているのみである。これは屋敷地の中において一定の場所を占めるという分布の在り方を示している。これらの墓址と第Ⅰ区で検出された墓址群とは出土遺物からみてほぼ同時期に営まれたものと思われる。したがって少なからず相互の関連はありうると思われる。またさらに屋敷地内の墓址との関係をどう評価するかが問題として残っている。

その他の遺構と遺物

第Ⅱb区の東南部からc区の南およびd区にかけて水田址が検出された。水田址には畦畔、畔溝、7類とした竪穴等が伴って検出されている。水田土壤はやや褐色がかった暗灰色土で、木炭、焼土、土器片を比較的多く含んだ包含層の下部に検出された。水田址そのものではないが、水田とともに溝と思われるものは溝の説明の項で述べたように、5~6条あり、当該地が屋敷地のみではなく、ある時期には水田としても利用されていたことが分かる。

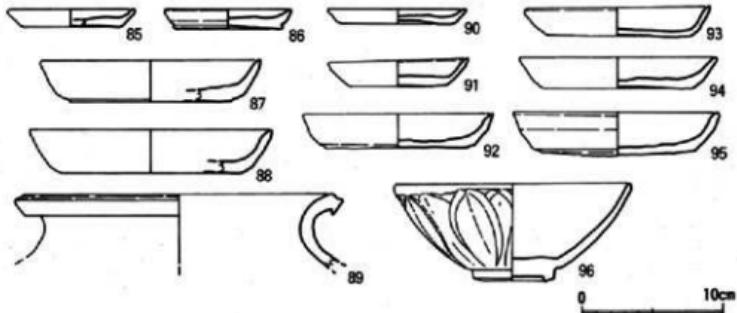


Fig. 39. 包含層、柱穴、井戸、溝出土土器実測図 (1/4)

SD25 : 85~89. 植生面 : 91
SIPD05 : 90. 包含層 : 92
SE4296 : 93~94. SX150 : 95
SE12 : 96

水田の平面形が明確なものは、東南部で検出された数反（SX4307～4309）しかない。水田の平面形は東西に長軸を持つ長方形であり、それらの規模は15～20×10～15m、面積にして約150～300m²弱の範囲におさまる。これらの水田区画は若干の方向のぶれはあるものの、復元条里の坪並、方向性とはほぼ合致している。畔はほとんどが基底部のみしか残っていないため、その高さは不明であるが、幅は0.5m前後を測る。畔溝が伴うのは南北に走る畔のみしかみられない。これは水掛かりの方向が南から北へ抜け、主要な水路となっていたと思われるSD25などの東西に走る溝へ落ちるようになっていたものと考えられ、かなり整備された水田だったと判断される。これらの水田址は、時期的には14世紀以降の時期の所産かと思われるが、詳細な時期の検討は本報告時に行ないたい。

そのほかⅡ区では、杭列が3条（SA03・04・11）検出されている。SA03は調査区の北側で検出されたもので近世以降の溝に伴う護岸用の杭列である。SA04は調査区の西南部で検出されたもので、おそらく11世紀頃まで遡ると思われる旧河川の流れに直交してほぼ直線的に設けられた井堰である。SA11は調査区東南部の旧河川内で検出された井堰で、流れに対して直交して杭を打ち水流を一端堰き、さらに河川の南側岸へ水を導くような構造になっている。流れの中央部分では杭と杭との間に横木を這わせ、しっかりした作りとなっている。

これらの井堰は、水田や屋敷地として利川されるようになりだす12世紀以前に、当該地周辺には、少なくとも小河川が流れていたということと、その水の利用が何らかの形で行われていたことを物語っていると言えよう。

出土遺物では土師器（皿・杯・土鍋）、土師質上器（擂鉢）、須恵質土器（壺・捏鉢）、瓦器（椀・皿）、瓦質土器（擂鉢）、滑石製石鍋などの日常雑器が量的には主体を占めるほかには、輸入陶磁器が日立つ。第Ⅰ区では白磁の割合が多かったのに比べて、龍泉窯系・同安窯系の青磁が多く、青白磁（口禿の皿、合子）、黒釉天目（椀）、褐釉陶器（四耳壺・鉢・壺など）がみられる。国内産陶器では備前焼、東播磨系須恵質上器、常滑焼などが見出されている。

水田址、溝からは馬糞が散発的に出土している。出土状況は二次的な堆積である。

小結

第Ⅱ区では、多々良条里地区の坪並に合致して区画された溝を持つ屋敷地が確認された。屋敷地は東西約一町（108m）、南北約半町（54m）の範囲で建物群が検出されたが、建物群の構成や小区画との関連については本報告で詳細に検討したい。なお調査区東南部で検出された水田址とそのほかの遺構群との関係については、東南部にのみ限定されるが、時期的に大きく3時期に区分できる。すなわち、掘立柱建物をはじめとする遺構群が分布していた段階、水田が營まれていた段階、そして再び掘立柱建物が見られるようになる段階である。

この屋敷地の形成と展開の過程については、旧河川から出土した井堰が利用されていた時期も含めて本報告で検討したい。

(4) 第Ⅲ区の調査

概要 第Ⅲ区は浄水場敷地の最も西側に位置し、広田の集落の東側に隣接している地点である。第Ⅱ区とはわずか50mしか離れていない。多々良川左岸からは南へ約300m離れており、標高がおよそ5.50m前後の沖積微高地に立地している。調査はa～c区の3区に分けて実施した。調査面積は2650m²である。b区は遺構の在り方から見て、建物の密集している範囲の東端部にあたる地点と思われ、広田集落側へさらに遺構は広がっていることが認められた。c区では遺構の種類・数は少ない。全般に遺構の残りは悪く、瓦粘土の採取によってかなりの部分が攪乱を受けている。

検出された遺構は、杭列、掘立柱建物、溝状遺構、井戸、土壤墓？、竪穴遺構、埋壺などである。第Ⅰ・Ⅱ区では検出されなかった遺構に、埋壺（SK 45・46・52）がある。またやや幅が広い溝内に礫石をほぼ垂直に積上げ、溝を東西に区割をしている性格不明の遺構（SX 53）も見られる。b区においては、第Ⅰ・Ⅱ区でみられたような遺構群を取り込んで囲む溝は確認されていない。

c区の北端部では、少なくとも幅が5m以上もある大きな溝（SD 3802）が検出された。その位置と方向性が復元条里と合致しているために、当該周辺における条里制の施行がどの時期まで遡るものかが注意された。

出土遺物は量的に少ない。土師器を中心として、瓦質土器や陶器が量的に目立つ反面、第Ⅱ区でみられたような龍泉窯系の青磁などの輸入陶磁器ではわずかしか見られない。国産の陶磁器では、古唐津、古伊万里、備前焼などが出土している。なお時期は異なるがSD 3802では馬の描かれた板絵が出土している。古代祭祀の一端を知る上で貴重な資料と思われる。

なおb区は、中世末から近世にかけての屋敷地の一端で、SD 3802は平安時代後期以降の溝であると思われる。



Fig. 40. 第Ⅲb区発掘状況(東から)



Fig. 41. 第Ⅲc区発掘状況(南から)

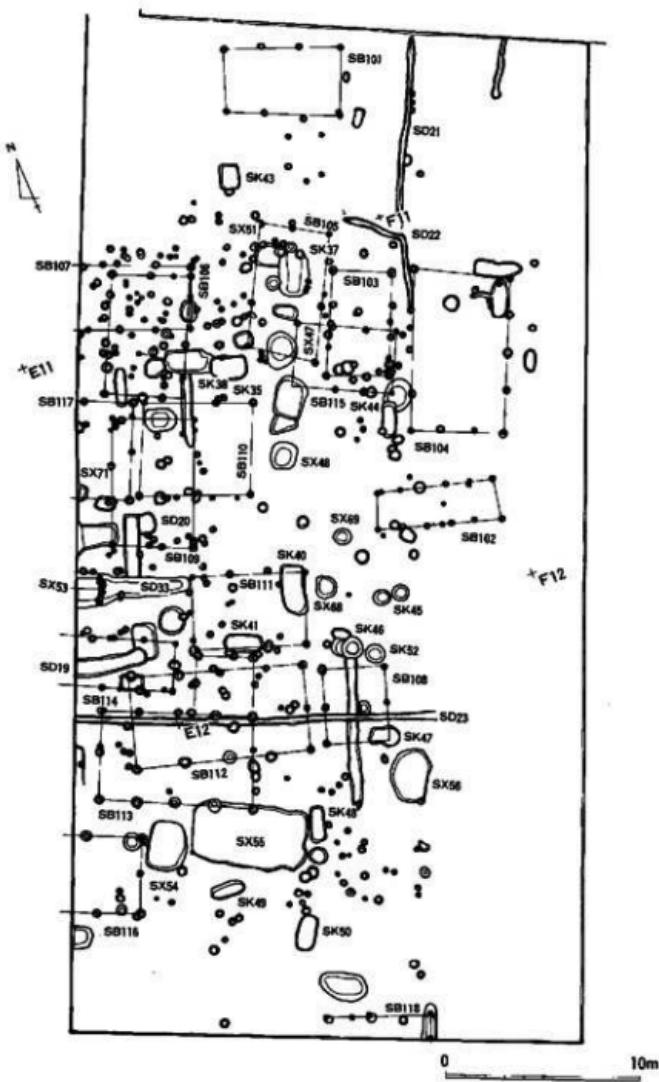


Fig. 42. 第三b区遗构分布图 (1/300)

掘立柱建物 (Fig. 43・44)

第Ⅲ区では、掘立柱建物は b 区でしか検出されていない。本来は c 区にもあったものと思われ、柱穴が若干検出されている。確認された掘立柱建物の規模は、 2×3 間の規模のものが数の上で主体となる。 1×2 間 1 棟、 1×3 間 3 棟、 1×4 間 1 棟、 2×3 間 8 棟、 2×4 間 2 棟、 3×4 間 1 棟（計 22 棟）で、SB12・14 が南北棟である以外は、ほとんどが東西棟である。個々の掘立柱建物の大きさはかなり異なっており、機能・用途の違いを反映しているものと思われる。この区では 2×4 間のもの（SB112・113）が最も大きな規模でそれよりもやや小さな 1×3 ・ 2×3 間などの掘立柱建物が隣接して建てられているという特徴がある。掘立柱建物の方向性は大きく 2 つに分けられる。また、2~3 回ほどの建替えがほぼ同じ位置で行われていて建替えにおいて、



Fig. 43. 掘立柱建物検出状況(北東から)

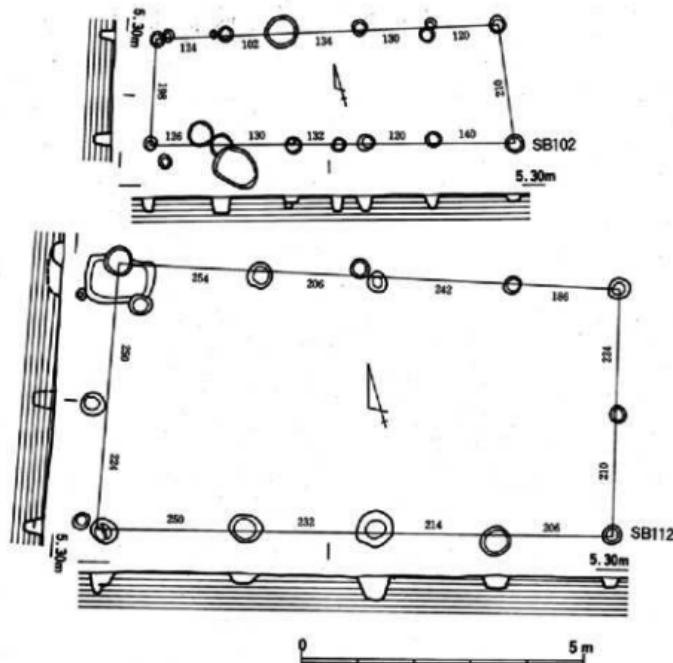


Fig. 44. 掘立柱建物平面および断面図 (1/100)

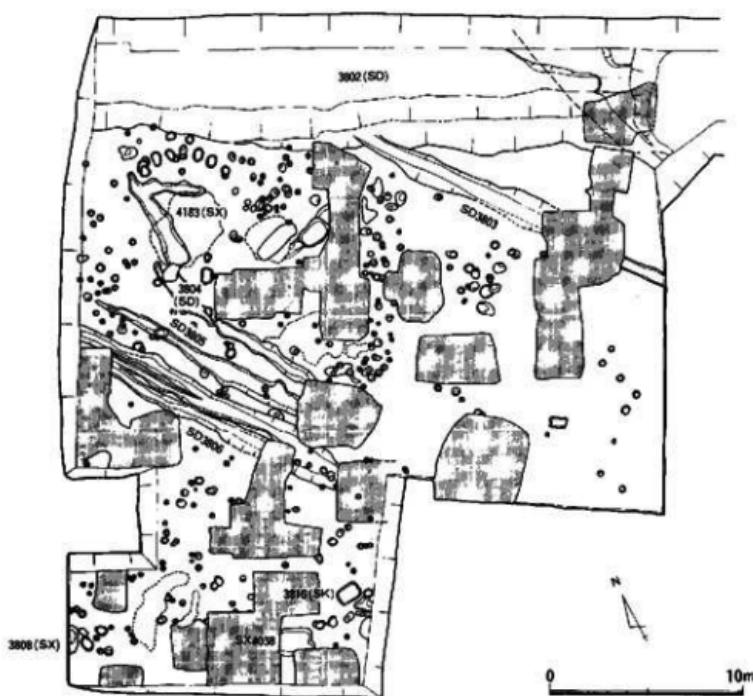


Fig. 45. 第III-a-c区遺構分布図 (1/300) (△部分は複数)

何らかの制約のもとで場所の選定が行われたものと思われる。十分に検討していないが、これらの点から小さなまとまりを想定すると、以下の3~4小区に区分けが出来よう。1つはSB112・113が位置する箇所で、SX55・SK48などと組合わさって、SD19・24によって画されている区画。また1つはSB104が位置する箇所で、おそらくSB103と組合わさって、SX47、SK48などの土壙や井戸などによって画されている区画。さらに1つはSB107・109が位置する箇所で、南をSD33で、東をSX47・48などの土壙や井戸によって画されている区画、の3つが一応想定できよう。なお3つめの区画はさらに南北の2つに分けられる可能性がある。各区画の規模についてはいずれも部分的にしか調査していないために明確でないが、200m²前後の広さが考えられる。この程度の広さの区画がいくつか寄り集まって大きな耕作地を形成しているものと思われるが、第III区はその東端部に相当しているものと考えられる。なお小X内

の建物の構成や、細かな時期の検討は本報告時に行いたい。

豊穴遺構

第Ⅰ区で類別した豊穴の各種類のものが本調査区でも検出されている。しかし全般に数は少なく、乍跡とした3類や、やや長大で礫石を配する5類などは検出されていない。また4類に分類された豊穴に近い形態を持ち明確に墓址と考えられるものは、c区で検出されたS X3816・3818・3820くらいである。遺存状況もあまり良くなく検出された豊穴のほとんどは、床面から10cm前後しか残っていない。

1類に分類された廃棄用と思われる円形もしくは楕円形の豊穴は、先述の小区画のいずれかの端のほうに偏って分布する特徴がある(S X54・56など)。c区ではこの種の豊穴は検出されていない。6類とした長大な豊穴はこの区では1基のみ検出されている(S X55)。大きさは東西に約5m、南北に3.5mを測る。第Ⅱ区のS X115などと比べやや小さい。遺物は投棄された状態で出土しており、最終的には廃棄場として利用された豊穴であるが、S B22などの掘立柱建物と関連していたことがその位置から考えられる。

溝状遺構 (Fig. 46~48)

第Ⅲ区では溝は16条検出されている。そのうち12条は、掘立柱建物などの遺構群とは直接の関連ではなく、おそらく水田に関連した溝であろうと思われる。S D19・24・33・35は建物と関連し、区画を形づくる溝と考えられる。いずれも遺存状況は良くない。c区のS D3802・3803以外はほとんどが基底面から10~15cmほどしか残っておらず、本来の形状はとどめていない。断面形は、S D3802が逆台形で、S D3803が「V」字形のほかは、浅皿もしくはU字形をなすようである。



Fig. 46, SD3802発掘状況(東から)



Fig. 47, SD3802内土層堆積状況(東から)

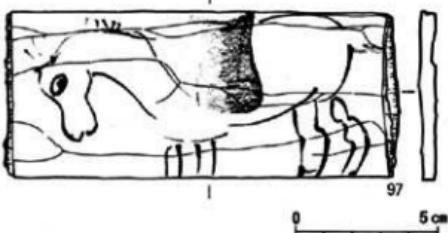


Fig. 48, SD3802出土板繪実測図 (1/2)

これらの溝状遺構の中で特に注意されるのは S D 3802 である。この溝は、上端部での幅が少なくとも 5 m 以上で、基底部は 2 ~ 3 m 前後、深さは 1.5 m 以上の規模があったと思われ、溝と言うよりも濠の様相を呈している。溝はほぼ直線的に東西に走っている。長さは調査区西端から東へ 35 m ほどのところまでしか確認できていない。この地点から東側については約 20 m ごとにトレーナーを設けて延長されるものかどうか確認したが、溝そのものは確かめられなかった。断面形は逆台形で、南壁には護岸用の杭列が打たれ、西端部では流れに直交する井堰が付設されている。また井堰に流れ着いた流木と共に馬の描かれた板絵が一点出土している。

この溝の位置は、復元条里の坪並にはほぼ合致している。日野氏の復元案を参考にすれば北六国八里十六坪の北西部分に位置しており、条里地割りとの関連が強い。

この溝の時期は、板絵が出土した（溝基底面から約 70 cm 上位）面が少なくとも平安時代後期ころまでは遡ると思われるが、時期比定の目安となるような遺物が出土していないために、その時期の上限がどこまで遡るものか判然としない。しかしいずれにせよ、当該地においては、平安後期には既に条里地割りが施行されていたことを物語っていると言えよう。

井戸 (Fig. 51)

第Ⅲ区では井戸は 1 基しか検出されていない (S X 47)。第 I ・ II 区で検出された井戸と比べると石組などは直径で約 1.5 倍ほどの大きさであり、水の容量がかなり大きいものになっている。井筒は残っていないが木桶だったものと思われる。

時期はこれも出土遺物が無いために明確でないが、掘立柱建物などの遺構群と平行する時期のものと考えておきたい。

土壙基・木棺墓

第Ⅲ区では明確に墓址と考えられるものは 3 基しか検



Fig. 49. SK46出土状況(南東から)

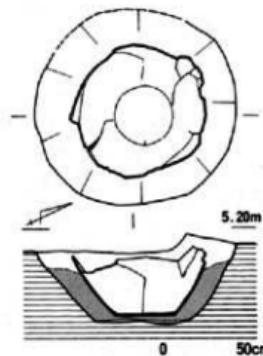


Fig. 50. SK46平面および断面図(1/30)



Fig. 51. SX47(井戸)断面(東から)

出されていない (SK 3816・3818・3820)。c 区の中央から南側にかけて散発的に分布している。分布の在り方から見て相互の関連性は低いように思える。墓址の可能性があるものとしては、b 区で検出された SK 35・39・41・47・48・50などがあるが、掘り方はやや不整形で副葬品と思われる遺物も出土していない。これらの時期は古代末～中世のものである。

その他の遺構と遺物 (Fig.42・50・52・53)

第 I・II 区でみられなかった遺構に SK 45・46などのような埋甕がある。抜き取られたと思われる円形の竪穴も幾つかあることから、実数はまだ多かったものと思われる。甕はその上半分は欠失しており全体の器形、大きさは窺えない。焼成が非常にあまくもろい瓦質土器で、その分布は b 区の南側に比較的集中している。これらは貯水用の施設と考えられるもので、SB 21およびその周辺の屋敷地内における機能を考える上で重要と思われる。機能が不明なものに調査区の西端で検出された SX 53がある。やや幅のある溝の途中に小児の頭ほどの礫石をほぼ垂直に積上げて分割している構造である。

小結 第 III 区では当該地周辺における古代条里地割りの施行がどの時期まで遡りうるのかを考古学的に検証できたことが一つの成果であろう。多々良込田遺跡では奈良時代の後半までにはすでに条里地割りの施行を示唆する溝が検出されているが、多々良条里区の中において歴史的にどのような面的な展開をしているのか、が今後に残された課題である。

中～近世にかかる建物群については、小区画された建物が寄り合ってより大きな屋敷地を構成している可能性が、部分的ながらも確かめられたことは一つの成果であろう。細かな検討は本報告時に行いたい。



Fig. 52. SK 52 遺物出土状況(南から)



Fig. 53. SX 70 完掘状況(東から)



Fig. 54. 第 III b 区作業風景(南東から)

(5) 第IV区の調査

概要

第IV区は浄水場敷地の西南部に当たる箇所である。多々良川左岸からは南へ約400m離れた地点に位置している。この地点は、戸原の集落が立地する洪積世台地の縁から多々良川までのちょうど中間に位置しており、第III区が占地する沖積微高地の南端に当たる地点である。周辺の標高は5.4m前後で、全体的に北東から南西の方向へ緩やかに傾斜しており、第II区よりも30~40cmほど低くなっている。試掘調査では、調査区南壁に平行する山河川が、東西に弧を描いて走っていることが確認されている。(Fig.59)

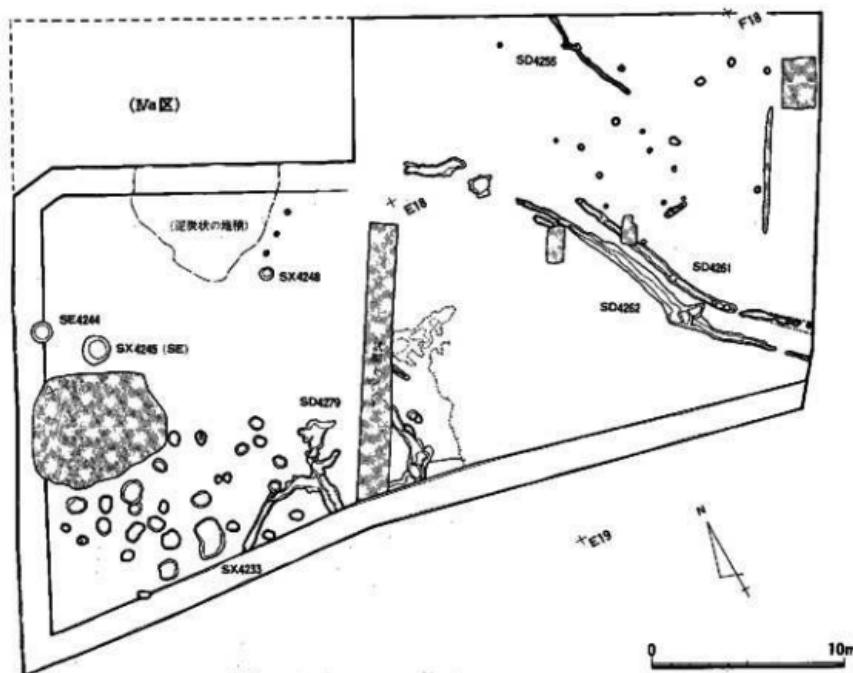


Fig. 55. 第IVb 区遺構分布図 (1/300) (アミ部分は推測)

調査面積は1320m²で、a・b区の2つの区に分けて調査を実施した。a区では遺構が検出されなかったために、主として当該区の土層堆積の状況を観察した。

a・b区の土層観察によると、I～III区が厚い砂礫層を基盤とする旧自然堤防上に位置していたのと異なり、第IV区ではそれら旧自然堤防の後背湿地に当たると思われる土層堆積の状況が観察できた。この調査区では基盤層はやはり砂礫層であるが、かなり深いレベルに見られ、その上に泥質土、黒泥土と呼ばれる土層が1～1.5mほどの厚さでみられる。そしてそれを覆うように古代以降の水田址を乗せる、明褐色シルト層が見られる。

この調査区の遺構はこの明褐色シルト層上面で検出された。検出された遺構は柱穴、水田に伴うと思われる溝状遺構、井戸、性格不明の円形の竪穴遺構などがあげられるが、数、種類共に少ない。これらの遺構はやや砂っぽい灰白色シルトを覆土としており、一時的に灰白色シルトによって覆われたものと思われる。

竪穴遺構 (Fig. 57)

第IV区では円形の竪穴が調査区の西南部でまとまって30基検出されている。大きさは直径が0.40～1.0mで、断面形は逆台形もしくは浅皿状である。第I区で1類とした竪穴遺構に形態的には似るもの、1類が多量の遺物を伴うのに対して、本調査区の場合出土する遺物はほとんどないという違いがある。一応8類と呼ぶこととする。埋土は、徐々に堆積していくたと思われ、一時的に埋まったものでない。粘土の採取場の可能性もあるが、性格づけは類例の比較検討を通じて、本報告時にに行たい。



Fig. 56. 第IVb区発掘状況(東から)

溝状造構

溝状造構は6条検出されている。いずれも水田に伴う畔溝である。遺存状況は悪く、5~10cmほどの深さしか残っていない。近世以降のものと思われるS D4255・4274以外は古代末以降の時期のものであるが、復元条里の方向とは合致していない。その方向性は旧河川の河道の方向に規定されているようである。S D4261・4262は畔と思われる弱い高まりを挟んで、東南から北西へ並行しながら走っている。この2条の溝は第Ⅲ区で検出された溝（S D4281など）と方向性、埋土を同じくするものである。S D4279などの性格は不明である。

井戸

井戸は調査区の西側で2基検出されている（S E4244・4245）。いずれも掘り方のみで井筒は出土していない。規模は掘り方の直径が1.3~1.5mで、深さが0.8~1.0mの大きさである。S X4245からは木器（櫛）が1点出土しているが、時期比定の目安となる遺物が出土していないためこれらの時期については不明である。

小結

第Ⅳ区においては主として平安時代後期以降のものと思われる水田跡の一部が検出された。水田の区画の形状は不明だが、その方向性は復元条里には合致しておらず、むしろ旧河川の河道の方向に規定されているようである。これは第Ⅲ区で検出された大溝の条里地割りとの整合性とは矛盾した在り方となっているようと思われる。しかしⅢ、Ⅳ区における土層堆積の観察によると、何回かの氾濫によって水田区画の形状、方向性が本来の形からそう異ならない範囲で変わらざるを得ない場合もあったのではないかと考えている。

この点については、第Ⅰ~第Ⅲ区で検出された旧河川や井堰の在り方を含めて、本報告時に検討したい。



Fig. 57. 第IV区南西部造構分布状況(北西から)



Fig. 58. SX4245発掘、出土状況(西から)

IV おわりに

以上、昭和59年～62年度にかけて調査された戸原麦尾遺跡の概要について述べてきた。各調査区における遺構、遺物についての細かな問題はそれぞれの項で述べたとおりである。なお遺物および記録類の整理は現在進行中であり、各遺構の時期、形態、遺構間の関連性などについて十分な検討をしないままの概要報告があるので、若干の誤謬もありうると思われる。本報告の刊行を急ぎ、今後十分な検討を加えると言うことで、その点については御了承願いたい。ここでは主に調査時の所見をもとに現段階での問題点を整理しておき、本報告に備えたい。

遺跡の構成とその範囲

調査の結果、浄水場敷地内においては、遺構の分布はおおきく4ヶ所にまとまることが確認された。敷地の北東部では溝によって方形に区画された屋敷地と3ヶ所に分散している墓址群が、中央部と西側では屋敷地および条里制に関係すると思われる人溝がそれぞれ確かめられ、さらにそれらの間ににおいては部分的に水田址の一部が検出された。これらの時期は古代末まで遡るものも若干あるが、鎌倉時代を中心とした中世全般にわたる時期のものである。また江戸時代にかかるものも第Ⅲ区では検出された。なおこれらの遺構は、北東部と西側においてはさらに敷地を越えて存在しており、広大な範囲で遺跡が展開していることが明らかとなった。遺跡周辺は種々の開発が急速に進行している状況もあり、何らかの保存措置および調査体制の整備が望まれるところである。

遺跡の形成過程

以上の遺構群の面的な在り方を旧河川も含めて模式的に示すと右図のようになる。これを参照しながら遺跡の形成過程を大まかに跡付けてみたい。浄水場敷地内には少なくとも4～5条の旧河川が確かめられており、それぞれの河道内において11世紀頃まで遡る井堰が認められた(S.A.01～11)。これらはおそらく取水用の井堰と思われ、当該地周辺は11世紀以降にはある程度の水田化が進んでいた可能性を示唆している。さらに第Ⅲ区の大溝もそ

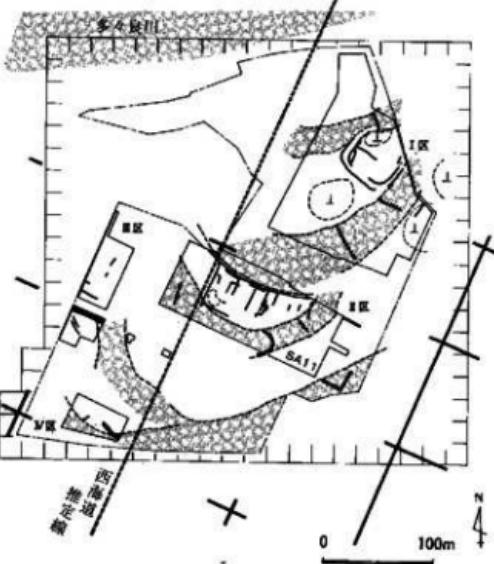


Fig. 59. 戸原麦尾遺跡概要模式図
(アミ部分は旧河川)

れらと一連のものと考えられよう。屋敷地あるいは墓地なりが形成されるのは調査対象区内においては12世紀にはいってからと思われ、SK1677等から見ると12世紀初頭まで遡ることが考えられる。やや飛躍するがSK1677の被葬者はこの地の入植初期の有力な人物であったと考えておきたい。SK1677はその後、第I b区の屋敷内における屋敷墓としての性格を付与されたものと思われるが墓址群の検討が必要であろう。遺物の出土量が増加する13世紀半ばから後半にかけて、第II区に屋敷地が形成される。恐らく第I b区の屋敷地とはある一定の期間並行して営まれたものと考えられる。

さらにこれらの屋敷地と共に、第I区においては墓地も形成されている。旧河川を挟んで東西に分かれる2つの群と、第I b区の屋敷地内的一群である。すべて述べたように、SK02・03などのように輸入陶磁器を中心とした副葬品を持つものとそうでないものといった、副葬品における質的な差が見られることは注意される。以上の屋敷地・墓などは、調査区全体で所々遺存していた焼土層の時期と各遺構の層位的所見によると14世紀前半まで断続して営まれていたと思われる。14世紀前半から後半にかけては本遺跡の周辺では建武3年（1336年）の足利尊氏と菊池武敏とが戦った多々良渕合戦を始めとして、貞治元年（1363年）の菊池武光と大友・小式氏の戦った長者原合戦まで数回の戦乱の下にさらされている。これらの合戦と焼土層とをすぐさま関連させるわけには行かないが、いわゆる南北朝動乱の影響を少なからず受けたことはまちがいないであろう。14世紀後半から15、16世紀にかけての遺物はほとんど見られなくなり、かなりの間にわたって当該地は屋敷地としては放棄されたことが想像される。これらの空白期間の後、第III区に中世末から近世にかかる屋敷地（集落）が形成されている。

主要な問題点について 本遺跡は北部九州の中世「集落」の在り方を知る上で非常に多くの問題を提起した。紙面が限られているので重要と思われるいくつかの問題について述べる。まず第I・II区で確認されたそれぞれの屋敷地の性格が具体的にはどう異なるかということである。この点についてはそれぞれの遺構と遺物の比較を通じて検討せねばならないが、一つの見通しとして言えば、第I b区の屋敷地は「居館」としての、まだ第II区の屋敷地については「集落」としての性格を一応考えておき、本報告時の検討課題としておく。なお第I b区の屋敷地の土壌の有無とそれが設けられる時期の問題については、立地上の特性から屋敷地の形成の初めから付属していた可能性もあることを付け加えておく。個々の屋敷地の構成は第II～III区において確認された小区画ごとの、また区画間の細かな時期の検討が必要であるが、これらの小区画が基本的には「集落」の構成単位になっているものと考えられよう。さらに当該時期の墓制については立地上の問題、屋敷地との関連も含めて本報告時に検討したい。

本遺跡の位置する戸原地区は、古代末から中世を通じて芦崎宮と関連が深い地域である。本遺跡の分析を通じて中世における荘園経営の実態の一端を知り得るものと思われる。文献史料とも併せて、以上の問題点を整理し、本報告時に検討したい。

Tab. 2 掘載遺構所見一覧

Fig. No	調査区	遺構名	種類	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	時期	備考
Fig. 15	I b	SE3086 井戸		井戸掘り方は円形プラン 約 2.0×1.65×0.84m 井筒は曲げ物(3箇所分有り) 約 0.60×0.56×0.20m	土師器(皿、杯、土鍋)、瓦器、 白磁、(皿・口元のもの) 梗V類	13C 後半以降	SE3115、 SD1675 を切る。
Fig. 17	I a	SK02 木棺墓		隅丸の長方形プラン 1.68×1.10×0.18m	土師器(瓶・杯) 椎葉系青磁(楕円)-2a類 刀子、棺釘	13C 前半以降	SK01か ら切られ ている。
Fig. 18	I a	SK03 木棺墓 か?		隅丸の長方形プラン 推定底 1.5×0.8×0.18m	土師器(皿小片) 椎葉系青磁(楕円類) 青銅製馬頭、文柄鏡 頭骨小片	14C 前半以降	
Fig. 19 20	I b	SK1677 木棺墓 か?		隅丸の長方形プラン 1.60×1.00×0.18~0.20m	白磁(楕円-4a類、皿昇-4a類) 青銅製六花鏡、 ガラス製小玉	12C 半ば以降	
Fig. 22	I b	SX1733 鋼冶に 関連したか?		隅丸の長方形プラン 0.90×0.58×0.18m	多量の木炭片、焼土、焼石が床に 堆積していた。		SK2292 を切る。
Fig. 22	I a	SK21 木棺墓		隅丸の長方形プラン 1.57×0.93×0.07m	出土遺物なし	時期不明	
Fig. 22	I a	SK17 不明 (木棺墓)		隅丸の長方形プラン 2.00×1.65×0.38m	土師器(皿、杯、土鍋、碗) 瓦器(碗)、須恵器、施釉陶器 龍泉窯系青磁(楕円-1~4、皿I-1) 同安窯系青磁(皿I-1a) 白磁(碗B-2類、V-4a類、皿I類) 青白磁(皿)	13C 後半以降	木炭片が やや日立 った。
Fig. 22	I a	SK33 土壙墓		やや不整形な橢円形 (推定底)2.3×1.6×0.35m	土師器(皿)	13C 後半以降	SD07 (SD2408) から切 られている。
Fig. 22	I b	SX4466 廃糞池 か?		長橢円形 2.43×0.75×0.15m	土師器(皿、杯、土鍋、碗) 瓦器(碗)	13C 前半以降	
Fig. 33 34	II b	SX315 半地下式 の木造家屋 か?		隅丸の長方形プラン 5.53×2.9×0.2m	土師器(皿、杯、土鍋) 瓦器、瓦器質土器(コト鉢)、 燒結陶器(合子) 粘土塊、 龍泉窯系青磁(碗I-1~4)、白磁	13C 後半以降	出土遺物 はSX116 とほぼ同 時期。
Fig. 36 37	II a	SE04 井戸		井戸掘り方は不整形な円形 プラン 1.16×1.0×0.70m 井筒は曲げ物(3箇所分有り) 0.38×0.36×0.34m	木製器、柱、 土師器(皿)		
Fig. 46 47	III c	SD3802 構造 遺構		断面形は連合型。 約25.8mの長さにわたって 構築。幅は5.3m+▲、深さ は検出面から1.4m 前後。	土師器(皿・ヘラ切り) 板状、杭剣、瓦片	古代	SD3803 から切 られている。
Fig. 49 50	III b	SK46 墓葬		やや不整形な円形プラン 1.7×1.7×0.47m	須恵質鏡		
Fig. 51	III b	SX47 井戸		井戸掘り方は椭円形プラン 2.28×1.84×0.7m 井筒石組 0.73×0.76×0.38m	土師器(皿) 陶器	不 明	SK52と 同じくら いの時間 か。
Fig. 52	III b	SK52 墓葬 か?		不整形な円形プラン 0.92×0.97×0.38m	須恵質鏡、唐津系陶器(碗) 木炭層が見られた。	13C 後半以降	
Fig. 53	III b	SX70 墓葬 か?		隅丸の長方形プランか 現存長 1.75×1.15×0.14m	備前焼(銀鉢)	13C 後半以降	

Tab. 3、擬立柱建物計測値表

Fig.No	調査区	建物番号	規格	断行		梁行		柱穴の数	基準の方向	床平面面積(m ²)	備考
				実長(m)	柱間寸法(西から東へ)	丈長(m)	柱間寸法(西から東へ)				
Fig.10	I b 区	SB 20	2×4	N. 7.70	1.90/2.00/1.94/1.88	E. 3.60		(12)	N-63 30 W	27.70	
				S. 7.74	1.94/2.00/2.00/1.80	W. 3.50					
Fig.10	I b 区	SB 21	2×4	N. 7.90	1.30/2.12/1.74/2.14	E. 3.70		(12)	N-63 -W	28.81	
				S. 7.56	2.00/1.64/2.14/1.78	W. 3.70					
Fig.31	II b 区	SB 63	2×4	N. 8.72	2.22/2.12/2.42/1.96	E. 3.96	2.16/1.80	12	N-63 -W	28.81	
				S. 8.70	2.22/2.06/2.42/2.00	W. 4.00	1.92/2.08				
Fig.31	II b 区	SB 59	2×3	N. 6.18	2.12/2.30/1.76	E. 4.30	2.10/2.30	10	N-74 -W	26.68	
				S. 6.44	2.12/2.34/1.98	W. 4.20	2.14/2.06				
Fig.31	II b 区	SB 62	2×2	N. 3.92	2.24/1.68	E. 3.34	1.50/1.84	8	N-71 30-W	12.70	
				S. 3.70	2.16/1.54	W. 3.36	1.60/1.76				
Fig.43	III b 区	SB 102	1×5	N. 6.10	1.24/1.02/1.34/1.31/2.0	E. 2.10		12	N-75 -W	14.14	SP598から切 られている。
				S. 6.48	1.26/1.3/1.32/1.2/1.4	W. 1.98					
Fig.43	III b 区	SB 111	2×4	N. 8.88	2.54/2.06/2.42/1.86	E. 4.34	2.24/2.10	12	N-73 30-W	41.11	SP598から切 られている。
				S. 9.02	2.50/2.32/2.14/2.06	W. 4.74	2.50/2.24				

注) Nは北側、Sは南側の側柱を、E・Wは東西の裏側を意味する。

(a: 口徑または直徑、b: 器高、c: 底径または高台径)
(d: 全長、e: 幅、f: 高さ)

Tab. 4、遺物所見一覧表

Fig.No	出土遺構	遺物No	遺物名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	その他の所見
Fig.13	SK 33	1	土師器・皿	a; 8.5 b; 1.3 c; 7.4	精良	良	しまりよい	明褐色 素切り
		2	土師器・皿	a; 8.6 b; 1.2 c; 6.8-7.0	精良	良	しまりよい	明褐色 素切り
		3	土師器・皿	a; 8.6 b; 1.1 c; 6.8	精良	良	しまりよい	明褐色 素切り
		4	土師器・皿	a; 8.6 b; 1.2-1.5 c; 6.8	精良	良	しまりよい	明褐色 素切り
Fig.13	SX 3350	5	土師器・皿	a; 8.8 b; 1.3 c; 7.2	精良	良	しまりよい	褐色 素切り
		6	土師器・皿	a; 8.1 b; 1.4 c; 6.5	精良	やや	しまりよい	明褐色 素切り
		7	土師器・杯	a; 12.8 b; 2.4 c; 9.4	精良	やや	しまりよい	褐色 素切り
Fig.13	SK 25	8	土師器・皿	a; 7.0 b; 1.5 c; 5.4	精良	やや	しまりない	明褐色 素切り
		9	土師器・皿	a; 8.2 b; 1.1 c; 6.4	精良	良	しまりない	褐色 素切り
		10	土師器・皿	a; 8.6 b; 1.1 c; 7.6	精良	良	しまりない	明褐色 素切り
		11	須恵質土器・捏鉢	計測不可	良やや	やめ無い	しまりない	口縁外に自然釉
Fig.13	SX 31	12	須恵質土器・捏鉢	a; 19.4 b; 6.8 c; 7.5	良やや	やめ無い	しまりわるい	明灰色 素切り
		13	土師器・皿	a; 8.6 b; 0.9-1.1 c; 7.0	良	しまりない	系切り、板目庄痕	
Fig.13	SP 3356	14	青磁・碗	a; 17.2 b; 6.4 c; 6.0	精良	堅致	青緑色 (龍) 輪 I 5b 類	
		15	青磁・碗	a; 5.3 b; 2.4 c; 4.0	精良	堅致	薄い灰青緑色 (同) 輪 I 5b 類	
Fig.13	SP 2403	16	青磁・碗	a; 16.0 b; 6.8 c; 4.8	精良	堅致	青緑色 外面ハラ沈線(H) 極厚質	
		17	土師質土器・土鍋	a; 24.2 b; 11.7 c; —	良やや	やめ無い	ややしまりわるい 内外面ハケ目溝特	

注) 输入陶磁器の分類は、横田賛二郎・森田熟 1978「太宰府出土の输入中国陶磁器について -一型式分類と編年を中心として-」九州歴史資料館研究論集4 を参考にした。

Fig. No	出土遺構	遺物No	遺物名称	法 案 (cm)	胎土	焼成	色調	その他の所見
Fig. 16	S E 3533	18	土 師 器・皿	a: 9.7 b: 1.1 c: 7.4	精良 良	しまりない	白っぽい褐色	ヘラ切りか
		19	土 師 器・杯	a: 13.5 b: 2.7 c: 11.1	精良 良	しまりない	褐色	糸切り
		20	土 師 器・杯	a: 16.4 b: 2.6 c: 13.0	精良 良	しまりない	明褐色	糸切りか
		21	瓦 器・碗	a: 16.8 b: 4.7 c: 一	精良 良	よくしまる	灰白色	ヘラケズリ
		22	瓦 器・碗	a: 一 b: 一 c: 6.6	精良 良	堅くしまる	灰色	ヘラケズリ
		23	須恵質土器・壺	計測不可	良	しまりない	青みのある暗灰色	
		24	須恵質土器・涅鉢	計測不可	良	やや堅板	灰白色	口縁部外間に自然釉
		25	瓦質土器・三足釜	a: 16.4 b: 11.8 c: 19.9	良	しまりわるい	黒灰色	
		26	土 師 器・皿	a: 8.8 b: 1.2 c: 3.6	良	しまりよい	褐色	糸切り
		27	土 師 器・皿	a: 9.2 b: 1.2 c: 一	精良	しまりよい	明褐色	糸切り
Fig. 21	S X 3137	28	土 師 器・杯	a: 12.8 b: 2.4 c: 8.6	精良 良	しまりよい	明褐色	糸切り
		29	土 師 器・皿	a: 8.6 b: 1.2 c: 6.0	精良	しまりない	明褐色	ヘラ切り
		30	土 師 器・皿	a: 8.8 b: 1.2 c: 一	精良	しまりわるい	明褐色	ヘラ切りか
		31	土 師 器・皿	a: 9.4 b: 1.2 c: 7.6	精良 良	しまりない	明褐色	糸切り
		32	土 師 器・皿	a: 9.8 b: 1.3 c: 7.8	精良	しまりよい	明褐色	糸切りか
		33	土 師 器・杯	a: 14.2 b: 2.5 c: 9.8	精良	しまりよい	明褐色	糸切り
		34	須恵質土器・捏鉢	a: 26.4 b: 9~10 c: 一	良	ややきめ重い	よくしまっている	口縁部外間に濃灰色
		35	土 師 器・皿	a: 9.3 b: 1.0 c: 7.6	精良	よくしまっている	明褐色	糸切り
		36	土 師 器・皿	a: 9.2 b: 1.1 c: 7.0	精良	よくしまっている	白っぽい明褐色	糸切り
		37	土 師 器・皿	a: 8.7 b: 1.0 c: 7.0	精良	よくしまっている	明褐色	糸切り
Fig. 21	S K 02	38	青 磁・碗	a: 17.1 b: 7.1 c: 5.5	精良	堅板	薄く青みがかった緑色(龍) I 2b類	
		39	青 磁・碗	a: 16.8 b: 7.7 c: 6.2	精良	堅板	薄く青色がかった青緑色(龍) I 2a類	
		40	青銅製鳳凰文柄鏡	全長 d: 23.4 番面の径 a: 12.8 番面は僅かに凸面。 柄の長さ: 10.8 柄: 2.1~2.5 厚さ: 0.3~0.45 柄の基部はやや厚くなっている。				
		41	青 磁・碗	a: 16.7 b: 7.7 c: 4.4	精良	やや青みの強い緑色	全面施釉(龍) I 2a類	
		42	青銅製六花鏡	a: 16.0 ± 0.21 鏡の大きさ: 1.0, 0.7 鏡の長さ: 10.8 柄: 2.1~2.5				
		43	白 磁・皿	a: 10.5 b: 2.6~2.9 c: 3.0	やや青みがかった灰白色	周V1a類		
		44	白 磁・皿	a: 10.6 b: 3.2 c: 3.6	黄白色	周V1a類		
		45	白 磁・皿	a: 10.4 b: 2.9 c: 3.0	黄白色	周V1a類		
		46	白 磁・皿	a: 10.4 b: 2.7 c: 4.4	薄青みがかった灰白色	周V1b類		
		47	白 磁・皿	a: 10.4 b: 2.7 c: 4.7	薄青みがかった灰白色	周V1a類		
Fig. 23	S X32	48	白 磁・碗	a: 17.5 b: 7.3 c: 6.1, 1.8	明白白	碗V4a類		初鑄年
		49	貨錢・開元通宝	a: 2.45 f: 0.13	鏨書			621

Fig. No	出土遺構	遺物 No	遺物名称	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	その他所見
	S X 32	50	貨銭・祥符元宝	a: 2.5 f: 0.12	楷書			1008
		51	貨銭・天禧通宝	a: 2.45 f: 0.12	篆書			1017~1021
	S D 1675	52	貨銭・大觀通宝	a: 2.5 f: 0.12	篆書			1017~1021
	S P 1742	53	貨銭・天聖元宝	a: 2.45 f: 0.12	楷書			1023
		54	貨銭・景祐元宝	a: 2.5 f: 0.15	楷書			1034
Fig. 23	S X 32	55	貨銭・皇宋通宝	a: 2.45 f: 0.12	篆書			1039
	S D 1675	56	貨銭・皇宋通宝	a: 2.52 f: 0.15	篆書			1039
	S X 2079	57	貨銭・皇宋通宝	a: 2.5 f: 0.12	篆書			1039
	S D 1675	58	貨銭・嘉祐元宝	a: 2.33 f: 0.15	楷書			1056
		59	貨銭・元豐通宝	a: 2.5 f: 0.12	篆書			1078
	S X 2079	60	貨銭・元豐通宝	a: 2.4 f: 0.15	行書			1078
		61	貨銭・元豐通宝	a: 2.95 f: 0.17	篆書			1078
	S D 1675	62	貨銭・紹聖元宝	a: 2.4 f: 0.15	篆書			1094
	S P 1742	63	貨銭・元祐通宝	a: 2.35 f: 0.13	行書			1086
	S X 32	64	貨銭・大觀通宝	a: 2.5 f: 0.15	楷書			1107
	I 区表土	65	貨銭・政和通宝	a: 2.43 f: 0.12	楷書			1111
		66	貨銭・洪武通宝	a: 2.3 f: 0.16	楷書			1368
	S P 1742	67	貨銭・永樂通宝	a: 2.5 f: 0.15	楷書			1408
		68	貨銭・宣德通宝	a: 2.55 f: 0.15	楷書			1426~1435
		69	土師器・皿	a: 8.4 b: 1.25 c: 7.8	精良 しまりよい 橙色		糸切り	
		70	土師器・皿	a: 9.2 b: 1.1 c: 8.8	精良 しまりよい 橙色		糸切り	
		71	土師器・皿	a: 8.9 b: 1.1 c: 8.0	精良 しまりよい 橙色		糸切り	
		72	土師器・皿	a: 9.7 b: 1.1 c: 7.8	精良 しまりよい 明褐色		糸切り	
		73	土師器・皿	a: 9.8 b: 1.0 c: 8.6	精良 しまりよい 灰褐色		糸切りか	
		74	土師器・皿	a: 9.9 b: 1.1 c: 7.8	良 しまりわるい 明褐色	ヘラ切りか		
		75	土師器・杯	a: 13.2 b: 2.7 c: 9.6	精良 しまりよい 橙色		糸切りか	
		76	土師器・杯	a: 13.2 b: 2.8 c: 9.0	精良 ややしまりわるい 暗褐色	糸切り		
		77	土師器・杯	a: 17.0 b: 2.3 c: 14.0	精良 しまりよい 橙色		糸切り	
		78	土師器・皿	a: 7.6 b: 1.2~1.3 c: 6.8	精良 しまりよい 白っぽい褐色		糸切りか	
		79	土師器・皿	a: 8.6 b: 1.3 c: 6.8	精良 しまりよい 明褐色		糸切りか	
		80	土師器・皿	a: 8.8 b: 1.4 c: 7.0	精良 しまりよい 白っぽい褐色		糸切りか	
		81	土師器・皿	a: 8.9 b: 1.2 c: 8.2	精良 しまりわるい 橙色		糸切り	
		82	土師器・皿	a: 14.0 b: 3.1 c: 10.8	精良 しまりわるい 明褐色		不明	

Fig.No	出土遺構	遺物No	遺物名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	その他の所見
Fig. 35	S X116	83	須恵質土器・程鉢	計測不可	良	堅緻	灰白色	口縁部は銀灰色
		84	須恵質土器・甕	計測不可	良	やや堅緻	灰褐色	
	S D25	85	土師器・皿	a:8.9 b:1.1 c:6.8	精良	ややしまりわるい	明褐色	切り廻し痕は不明
		86	土師器・皿	a:9.0 b:1.2 c:7.8	精良	しまりわるい	明褐色	内外面ナデ
		87	土師器・杯	a:15.4 b:3.0 c:11.4	精良	しまりわるい	褐色	糸切り
		88	土師器・杯	a:16.8 b:3.1 c:12.3	精良	ややしまりわるい	明褐色	糸切りか
		89	須恵質土器・甕	a:22.0	良ややきめ細い	ややあまい	暗褐色	外面 タタキ
Fig. 39	S P 1205	90	土師器・皿	a:9.6 b:1.0 c:7.8	精良	しまりよい	褐色	糸切り
	II検出面	91	青白磁・皿	a:9.8 b:1.8 c:7.0	精良	堅緻	青っぽい透明な白	今山窯系 直口盤
	II包含層	92	土師器・杯	a:13.5 b:2.5 c:9.8	精良	よくしまっている	明褐色	糸切り、板目圧痕
		93	土師器・杯	a:13.1 b:2.0 c:10.1	精良	よくしまっている	明褐色	糸切り、板目圧痕
	S E 4286	94	土師器・杯	a:14.0 b:2.3 c:10.6	精良	しまりわるい	暗灰一灰褐色	糸切り
	S X 150	95	土師器・杯	a:14.6 b:3.1 c:11.4	精良	しまりよい	褐色	糸切り、板目圧痕
Fig. 48	S E 12	96	青磁・碗	a:16.8 b:7.0 c:6.0	精緻	堅緻	モスグリーン(龍)碗	I 5b類
	S D 3802	97	板絵(絵馬)	a:14.1 c:6.0 f:0.6	付質:杉	板目材	小口は表裏からの切り込み。	

あとがき

あしかけ4年もの長い間続いた戸原麥尾遺跡の調査は、多くの成果を上げながら昭和62年10月15日をもって無事終了することができました。

これは、地元の方々の文化財に対する深い御理解と、有形無形の数知れない多くの御協力の賜物と思います。最後になりましたがあらためて感謝の意を表します。

なお発掘調査にあたっては地元から下記の方々の参加を得ました。特に松永茂氏、長勝伸氏には調査にあたっていろいろと便宜を計っていただきました。記して感謝の意を表します。

調査補助員 白石公高 竹下弘美

整理作業 柳田猷子 花井祝子 大坂静代 森本満里子 田鍋町子 戒崎喜久美

山田スミ代 出口三千代

調査作業 入江英美 松永茂 長勝伸 森山恭介 高浪信夫 熊本義徳 山本一夫 三留清馬 長義人 長季一 神尾順次 黒木伸一 岩隈史郎 伊藤末信 本田直裕 千種務 河野裕之

安部国恵 安部サエ子 因弘子 薙野弥恵子 長武子 長とし子 西村康子
 田村妙子 田鍋勝代 黒木良子 黒木澄子 松永一枝 大齒ミツ子 長サト
 高木京子 長福代 藤スエ子 松尾フタエ 長トモエ 森山タツエ 菩提道子
 柴田スマ子 長嘉鶴子 池見恭子 尾畠信江 長喜美子 長絢子 田鍋ヤサノ
 山野キヨカ 西村きくえ 田中聖子 安増綾子 馬場イツ子 川添佳子



柏屋 都 柏屋町

戸原麦尾遺跡(1)

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第189集—

1988年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 博巧印刷株式会社
福岡市南区那の川1丁目9番4号
